大津ロクベエ遺跡

平成４年度一般国道249号線（能越自動車道）
改良工事に係る緊急発掘調査報告書

1993年

石川県立埋蔵文化財センター

大津ロクベエ遺跡

平成４年度一般国道249号線（能越自動車道）
改良工事に係る緊急発掘調査報告書

１９９３年

石川県立埋蔵文化財センター

遺跡遠景（南から）

遺跡近景（南東から）

巻頭図版2

道状遺構（ＳＦ01）

Ⅲ区出土唐津系陶器

例　　言

1．本書は石川県鹿島郡田鶴浜町大津地内に所在する大津ロクベエ遺跡の発掘調査報告書である。

2．本調査は一般国道249号線（能越自動車道）改良工事にかかる緊急発掘調査であり、石川県土木部道路建設課及び七尾土木事務所の依頼により、石川県立埋蔵文化財センターが実施した。

3．発掘調査は平成４（1992）年４月30日～同年９月25日にかけて実施し、木立雅朗・土屋宣雄（以上当センター主事）が担当した。また、関森香住氏（能登島町教育委員会　石川県市町村埋蔵文化財専門職員長期研修生）の協力を受けた。

4．発掘調査によって出土した遺物の整理は土屋が担当した他、横山そのみ・竹内弘美・越田純子・池村ひとみ・山本澄美子の各氏の援助・協力を受けて実施した。

5．本書は第２章第２節を木立が、その他は土屋が執筆した。編集は土屋が行った。

6．発掘調査から本報告書刊行にあたっては下記の諸氏・機関の御教示、協力を賜った。記して感謝の意を表したい。

大橋康二・渡辺芳郎・野上建紀・宮田進一・唐川明史・増山　仁・小島和夫・西野秀和
藤田邦雄・垣内光次郎・栃木英道・本田秀生・伊藤雅文・松山和彦・川畑　誠・端　　猛
七尾土木事務所・㈱在沢組・㈱野桑組・セントラル航業株式会社

7．本書で用いる方位はすべて真北を指し、水平基準は海抜高（m）である。

8．本書では以下の略記号を用いた。

ＳＤ＝溝状遺構　　ＳＫ＝土坑状遺構（一部井戸含む）
ＳＦ＝道状遺構　　Ｐ＝ピット状遺構

9．出土品及び記録資料等は当センターにて一括して保管管理している。

目　　次

第１章　位置と環境 …… 1

第２章　調査の経緯と経過 …… 4

第１節　調査の経緯　　第２節　調査の経過

第３章　調査の概要 …… 10

第１節　地　形　　第２節　調査区　　第３節　地　層

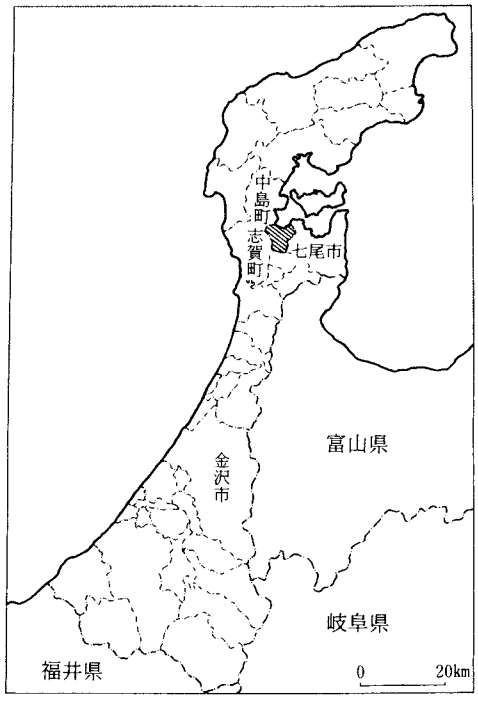
第４章　遺構と遺物 …… 14

第１節　Ⅰ区の遺構と遺物　　第２節　Ⅱ及びⅢ区の遺構と遺物

第５章　まとめ …… 44

第１章　位置と環境

大津ロクベエ遺跡は石川県鹿島郡田鶴浜町大津粟原之部に所在する。田鶴浜町は能登半島中央部に位置し、北は七尾湾、東は七尾市、南は鳥屋町、北西は中島町、南西は羽咋郡志賀町に接しており、町域は東西に約８km、南北に約６kmの逆三角形を呈し、面積は約30km²である。東部地域では東南東にそびえる石動山を発源とする二宮川が北流し、七尾西湾に注ぎ、河岸には沖積平野が広がる。南西には山岳信仰の霊峰赤蔵山（標高179m）が安山岩およびその集塊岩より形成されている。本遺跡(１)が所在する北西の大津地区は海岸線を除くと三方を山に囲まれている。東は赤蔵山、西には標高137.6mの天行寺山がそびえ、志賀町徳田の天行寺堤に水源を発する大津川が貫流し、七尾西湾に注ぐ。本遺跡は大津川の北側で、天行寺山系の南南西丘陵端の谷部に立地する。

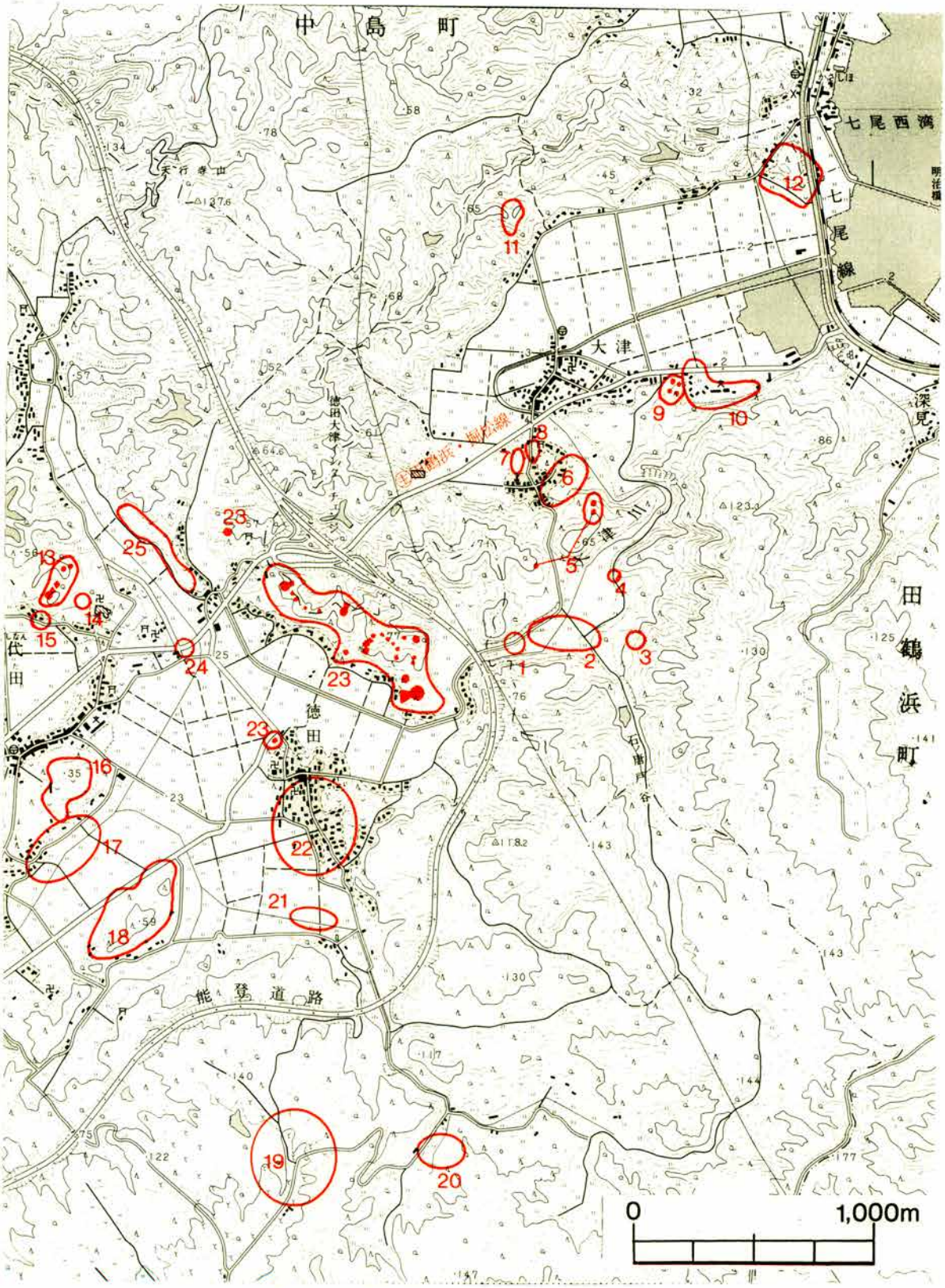


第１図　田鶴浜町位置図

縄文時代の大津の入江は現在の集落付近まできており、田鶴浜の台地の縁まで海水が入りこんでいた。遺跡の分布は平地や河川に面した低丘陵の突端に点在する。本遺跡の北方標高約７mの緩丘陵上には縄文から中世に至る複合遺跡の大津遺跡(６)が立地する。1991年に一部、県立埋蔵文化財センターが調査し、縄文時代前期後葉に属する竪穴状遺構、石組状遺構、土坑等を検出し、縄文土器多数他を出土した[1]。これらのうち小骨片の散布状況等から墓と考えられる遺構を確認しており、県内の同時期の墓制を考える上で貴重な遺跡でもある。また本遺跡の南側の大津川辺には、大津くろだの森遺跡(２)がある。地元では雑木の生えた神秘的な霊地として扱われている。また周辺の分布調査により東方の赤蔵丘陵端部にも遺跡が広がっている。この北方の同丘陵端部には磨製石斧の出土をみる大津堂ケ谷内遺跡(４)が位置する。

次の弥生時代には大津遺跡で磨製石剣が出土している他、すぐ西脇に小形有樋式石剣を出土した大津神社境内遺跡(７)が立地し、青銅利器模作遺跡の出土地としてその性格の究明がまたれる。

古墳時代に入ると本遺跡南西の丘陵上に25基からなる徳田古墳群(23)が位置する。燈明山古墳（徳田第１号墳）は最南端の通称「燈明山」と呼称する標高約46mに立地する古墳前期の前方後円墳である。石川考古学研究会幹事唐川明史氏らによる測量調査[2]により、墳長約83.5m、後



第２図　大津ロクベエ遺跡と周辺の遺跡（Ｓ＝1/25,000）

円部径約50mを測り、二段築成で葺石をもつと判明した。主体部は地中レーダー探査によって、後円部頂ほぼ中央で墳丘主軸に平行の可能性があると指摘している[3]。次に大津古墳群(5)は横穴式石室をもつ円墳3基から構成される。1号墳は径約10mを測り、主体部は両袖式の横穴式石室で副葬品として鏡、刀、鉄鏃、金・銅環等が出土している。また、主体部に横穴式石室を用いる古墳には4基の円墳よりなる大津東古墳群(9)がある。

奈良・平安時代の遺跡には大津入江辺に大津小学校の校庭拡張の際、製塩土器が発見された大津小学校遺跡(6)があり、地理的環境を生かしたものといえる。また、土田盆地では徳田宮前遺跡(24)、代田営団遺跡がみられる。

中・近世の当地は能登国鹿島郡笠師保に属する。本遺跡の東方三引保の赤蔵山では、霊山として山岳信仰の対象になっており、頂部には赤倉神社が鎮座する。観応の擾乱時、足利尊氏方の吉見氏頼軍が拠点とし、越中から攻め入った直義方の桃井直信軍を撃退している。また、石川考古学研究会会員宮下栄仁・垣内光次郎氏らによる踏査により、平安時代の遺物が採集されており、同時期まで遡る可能性が指摘されている[4]。本遺跡の南東の大津赤兀遺跡(3)は配石址を確認しており中世墓跡と推定される。

天正8(1580)年大津は織田信長より鹿島半郡(現鹿島郡の西南部地方一体・二宮川西岸部)を給された長連龍領であった。寛文11(1671)年には加賀藩の直轄領となる。家数は元禄16(1703)年には百姓34、天保15(1844)年は百姓113、頭振6の総数119軒あり、人数は507人と記録されている[5]。

この他当地には、内浦街道と外浦街道を最短距離で結ぶ道として利用された『大津往来』が通っていた。これは、大津から志賀町の代田－火打谷－掘松等を経て、川尻に至る三里余の道で、大津より代田に抜ける峠越えには、①地元では「殿様道」と呼ばれている本遺跡北方を東西に走る現在の町道を通るものと、②現在の主要地方道田鶴浜－掘松線を通るものの2つのルートが想定されている。(第2・37図参照)

また、大津往来は、内浦街道を宿継して金沢へ運搬するよりも、内浦から大津まで船積みし、そこから陸送して川尻浦で再度船で運ぶという方法により、特に冬、海荒で珠洲三崎廻りの船積みコースがとれない場合、有効な手段となった。しかし、このコースを通ると二宮以下の宿駅には荷が通らなくなり、大打撃を受けるため、運ばれる物には制限が加えられたが、時間的・経済的に有利なため、宿抜けをするものが多く、宿駅との間で紛争が絶えなかった。この後、幕末から明治にかけて、この道筋に幅8間、深さ5尺、総間数9,674間の大運河計画が持上がったが、船舶の大型化と経費の膨大さから成し得なかった。

このように、当時の大津は水陸交通の要衝で、往来が盛んであったことが窺われる。

1. 大津ロクベエ遺跡
2. 大津くろだの森遺跡
3. 大津赤兀遺跡
4. 大津堂ケ谷内遺跡
5. 大津古墳群
6. 大津遺跡
7. 大津神社境内遺跡
8. 大津神社前遺跡
9. 大津東古墳群
10. 大津小学校遺跡
11. 黒詰遺跡
12. 蛸島遺跡
13. 代田古墳群
14. 代田八兵衛地蔵墓
15. 代田遺跡
16. 仏木新林遺跡
17. 館開テラアト遺跡
18. 館開城跡
19. 得田城跡
20. 得田コイデ遺跡
21. 徳田渕ヶ谷内遺跡
22. 得田氏館跡
23. 徳田古墳群
24. 徳田宮前遺跡
25. 矢田遺跡

第２章　調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯

本遺跡の調査は一般国道249号線（能越自動車道）改良工事にかかる緊急発掘調査である。

能越自動車道は、富山県の北陸自動車道小矢部砺波ジャンクションから、高岡市、七尾市を通り、徳田大津インターより能登有料道路を一部利用して輪島市に至る約100kmにおよぶ自動車専用道路で、能登地域と三大都市圏との高速交通体系を確立するとともに、地域の活性化に寄与することを目的として計画されたものである。

平成３年４月10日付けで石川県七尾土木事務所長より、同工事にかかる羽咋郡志賀町徳田地区から赤蔵山系を抜け、田鶴浜町三引、高田地区に至る延長約６kmの埋蔵文化財分布調査の依頼があり、石川県立埋蔵文化財センターでは平成３年７月17日～８月23日にかけて人力及び重機による試掘調査を実施した。

その結果、同事業範囲には本遺跡（約5,000㎡）をはじめ、田鶴浜町大津赤兀地内で、縄文時代の大津くろだの森遺跡（約8,000㎡）・中世の大津赤兀遺跡（約2,000㎡）、同町三引地内で平安時代の三引Ｃ遺跡（約2,200㎡）・三引Ｄ遺跡（約3,000㎡）、弥生時代の三引Ｅ遺跡（約4,000㎡）、縄文時代の三引Ｆ遺跡（約800㎡）の計７遺跡、約23,000㎡にのぼる遺跡が発見され、同年８月30日、七尾土木事務所長あて、その結果と工事にあたっては事前の発掘調査が必要であることを回答した。

平成４年４月20日、七尾土木事務所長より本遺跡の発掘調査の依頼があり、平成４年度当センターで緊急発掘調査をすることとなった。

尚、同事業にかかる遺跡の発掘調査は今回が初めてであり、また、路線内の分布調査は継続中で、平成４年度の分布調査では三引Ｃ・Ｄ遺跡で新たに約15,000㎡の遺跡が確認されている。

第２節　調査の経過

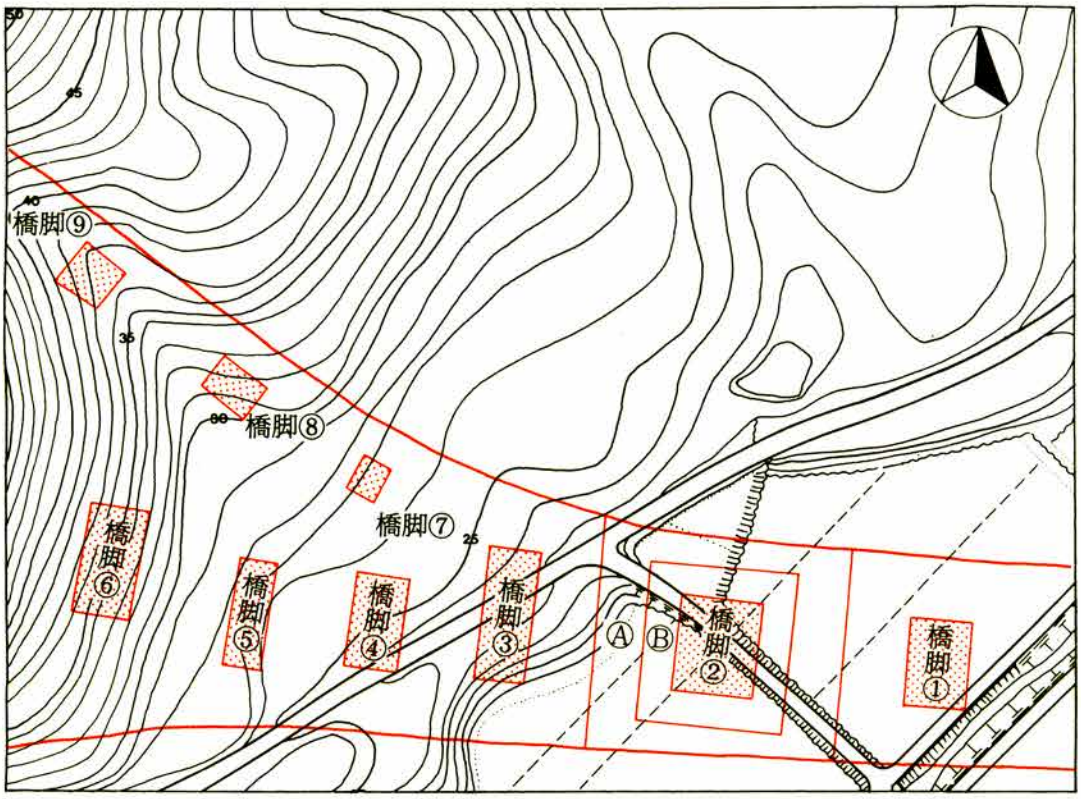
調査区には町道と農道があるが、工事現場の見学や七尾土木事務所との協議の結果、橋脚建設に際して橋脚の基礎を作るため広めのオープン・カットを行うことが判明した。路線内で削平を受けない部分はほとんどなく、道路下の遺跡も確実に削平される。遺跡に支障がないのであればすでに道路となっている部分の発掘調査を行わないのが通例である。しかし、削平されることが明らかとなったため、発掘調査が必要であることを七尾土木事務所と協議した。しかし、工事車両の通行や耕作のため道路を通行止めにできず、迂回させない限り道路下部分を調査できない。そのため、道路下の調査は工事直前に立会い調査を行うこととした。ただし、重要な遺構の延び等が確認された場合には次年度以降に道路を迂回させて発掘調査を行うこととした。

調査開始時に以前の試掘調査の確認を行うために、重機で再試掘を行った。

その結果、Ｉ区では耕作土下層に地山質の黄色シルト層があり、その上面にピット状の遺構が

確認された。以前の試掘調査では遺構包含層はこれより下層であったが、とりあえず黄色シルト層の上面まで掘り下げることにした。この面では中世の畑の畝溝を検出し、その後、黄色シルト層を除去したところ、さらに下層の畑を検出した。また、断面精査の結果、平面でとらえられなかった面を確認し、黄色シルト層が複数回の盛土層であることが分かった。誤認して一息に掘り下げてしまったことを反省させられたが、当初から分かっていたとしても、分層発掘は極めて難しかったであろう。現在でも分層発掘できる自信があまりない。下層の畑は出土遺物から上層と同じく中世と判断されたが、谷に堆積した黒色土を遺構面としていた。これを除去し、地山面まで掘り下げたところ、縄文時代に逆上ると思われる谷地形を検出した。

Ⅰ区の調査中、Ⅱ・Ⅲ区の表土を掘削した。黄色の盛土層は確認されなかったが、再試掘でⅠ区と同じ黒色土を確認していたので、Ⅰ区の畑が連続していたと推定し、断面を精査したが畝溝などは確認できなかった。念のため重機で遺構検出を試み、黒色土上面まで掘削したが、やはり遺構らしきものは検出できなかった。そのため、ここでは早々に検出を諦め、地山近くまで重機で掘削した。しかし、町道拡幅に伴う盛土層などとの識別が難しく、近世の遺構面を十分に認識できずに地山まで掘削したことがあとでわかり、再び反省させられた。遺構精査後、遺構覆土の色の違いと断面精査から、灰色系統の近世遺構と、それ以前の黒色系統の遺構があることがわかり、複数の面が存在していたことが判明したのである。黒色土は中世のみならず近世にあっても



第３図　能越自動車道橋脚工事位置図（S＝1/1,500）

遺構面になっていた。近世では黒色シルトの上位が土壌化して灰色に変化したものと推定される。そのため、Ⅲ区では最低2面の遺構面が存在したが、地山上面の一面で総ての面の遺構検出をしてしまった。浅い遺構は削平してしまったであろう。そのためか、Ⅱ区ではほとんど遺構を確認できなかった。Ⅲ区では主に近世の遺構を確認した。近世では墓と推定される土坑や道跡、井戸などが確認された。また、中には掘り方を持つ柱穴が2個一対で2組確認されたが、掘り方からプラスチックが出土し、最近まで利用されていた畑に伴う遺構もあることが分かった。

以上の調査成果から、特に重要な遺構が道路下に伸びているとは考え難かったため、道路下部分については工事直前に立会い調査を行うこととした。その後、工事に先立ってⅠ区の町道側と農道部分の立会い調査を行った。町道側はすぐに地山が立ち上がり、畑が山際に作られたことがわかった。町道下はやや急な斜面であり、遺構が存在しないことを確認した。また、農道部分は盛土が厚く、地山ラインが急激に落ち込んでいることを確認した。農道下についても畑はそれほど伸びていないと思われた。Ⅲ区については調査年度中には工事に入らないため、次年度以降に立会い調査を行うこととした。

なお、2トレンチの排土中から中島町・唐川明史氏が7世紀代の須恵器（第8図1）を採集された。Ⅲ区では確認できなかった時代の遺物であり、このトレンチでは遺構もほとんど確認できず、次年度以降に調査を予定している西北部分からの流れ込みと推定された。そのため、確認できなかった町道下部分を除いた1・2トレンチ付近は遺跡が存在しないと判断した。また、調査中に次年度以降の調査予定地の再試掘を行い、遺跡の範囲を絞り込んだ。以前の試掘調査では立木などがあり、十分な試掘調査ができなかったため、立木伐採後に再調査が必要であった。その結果、第4図のような範囲に推定された。遺物の出土は僅かであるが、斜面途中の平坦面に遺跡が立地しているようであった。

Ⅱ・Ⅲ区の調査中、隣町の中島町で同町教育委員会・細口喜則氏が殉職された。調査中に試掘穴が崩壊し、生き埋めとなった痛ましい事故であった。細口氏には当遺跡について地の利を生かした指導を頂こうと思っていた矢先でもあり、残念でならない。心から追悼の意を表したい。

事故については唐川明史氏の追悼文が詳しい（唐川明史　1992　「忘却の泥中に真白き柱を建て－喜則君への哀悼記－」『石川考古』第213号　石川考古学研究会）。細口氏が亡くなった原因は決してヘルメットの未着用だけではない。氏の置かれた労働環境が様々な形で悪い方向に働いたためであったが、この事故を契機に発掘現場の安全管理も問題視された。当遺跡では調査区に隣接した町道に工事用の大型車両が行き来し、Ⅲ区と町道との比高差が大きいなど危険な要因が多いこともあり、事故後は作業員を含め全員がヘルメットを着用して作業を行った。慣れぬヘルメットをかぶって行き来する大型ダンプを見上ると、言い知れぬ気持ちで一杯になった。

第４図　調査区位置図（S＝1/1,500）　0　50m

発掘調査の範囲

試掘調査トレンチ位置

試掘調査の結果遺跡が確定した範囲

道路工事範囲

調査日誌（抄）

4月22日　七尾土木事務所担当者と現地にて打ち合わせ

4月30日　調査対象区域内重機による切り木等整理

5月1日　調査対象区域内の詳細な遺跡分布調査（重機によるトレンチ調査）を実施し、遺跡の範囲を確定するとともに、今年度の発掘調査対象区域を決定する。（調査区を東よりⅠ・Ⅱ・Ⅲ区と大別することを決める）

6月1～2日　Ⅰ・Ⅱ区の重機による表土掘削を実施。

6月8日　発掘器材搬入。Ⅰ区上層面の遺構検出。グリッド設定作業（～9日）。

6月9日　Ⅰ区上層面の遺構検出作業終了。遺構検出状況の写真撮影を実施し、遺構の掘り下げを開始する。

6月10日　Ⅰ区上層面遺構完掘。同遺構の平面図作成（～11日）。

6月12日　Ⅰ区上層面遺構の平面図レベル記入。同遺構完掘状況写真撮影実施。

6月15日　Ⅰ区黒灰色シルト層（中層ベース面）まで断ち割り調査を実施し、中層面遺構を確認する。

6月16日　Ⅰ区中層面まで重機による掘削。Ⅱ・Ⅲ区の重機による表土掘削を実施（～17日）。

6月17日　Ⅰ区中層面遺構検出作業を実施し、同遺構検出状況写真撮影を行う。同遺構の掘り下げを開始する。

6月18日　Ⅰ区中層面遺構の掘り下げ。

6月19日　Ⅰ区中層面遺構完掘。同遺構完掘状況写真撮影実施。

6月22～23日　Ⅰ区中層面遺構の平面図作成。Ⅲ区遺構検出作業。

6月25日　Ⅰ区中層面遺構の平面図レベル記入。Ⅲ区遺構検出作業。七尾土木事務所と町道部分の取り扱いを現地において協議し、橋脚②にかかる部分については調査するが、橋脚③にかかる部分は協議継続とする。（第3図参照）

6月26～29日　Ⅰ区中層面より下層を重機により掘削し、灰色シルト層で、遺構（ＳＫ6等）を検出したため、その面で調査することとする。Ⅲ区遺構検出作業。

6月30日　Ⅰ区遺構検出作業。北西丘陵谷部重機によるトレンチ調査。

7月1～2日　Ⅰ区遺構を掘り下げる。Ⅰ区北方（Ｅ－4区付近）では地山面を検出しているが南方の地山の状況を確認するため断ち割り調査を行い、灰色シルト層より縄文土器等を出土した。

7月3日　Ⅰ区下層（地山）面まで重機による掘削。Ⅲ区遺構検出作業（～6日）。

7月7日　Ⅲ区遺構検出状況写真撮影実施。同遺構掘り下げ開始。

7月8～10日　Ⅲ区遺構掘り下げ。

7月16日　Ⅱ区遺構検出作業および同遺構完掘。

7月17日　Ⅲ区遺構掘り下げ。

7月20～22日　Ⅰ区下層面遺構検出および掘り下げ。Ｃ－3区遺構掘り下げ。

7月27日　Ⅲ区溝状遺構等のセクション図作成。

7月28日　航空測量実施。遺跡全景写真撮影。

7月29日～8月5日　補足調査および断面図作成。

8月8日　現地説明会を実施し、「志賀町シルバーハウス歴史探訪講座」の皆さんを中心に34名の参加を得た。

8月11日　北西丘陵谷部を重機により試掘し、遺跡の範囲を確認する。発掘器材を撤収する。

8月24日　北西丘陵谷部の埋蔵文化財の範囲を確定する。

9月25日　Ⅰ区の町道側とⅠ－Ⅱ区間の農道部分の立会い調査を実施。

調査参加者

調査担当者　木立雅朗　土屋宣雄（以上当センター主事）

調査補助　関森香住（能登島町教育委員会職員　平成4年度石川県市町村埋蔵文化財専門職員長期研修生）

作業員　調査の実施にあたり地元の大津地区を中心に周辺地区の有志の参加・協力を得た。
岡田正一　浅瀬義信　谷渡すい　岡田松枝　輪瀬千代子　時国久美子　銭元ちよ子
土本眞佐子　西崎百合子（以上田鶴浜町大津地区）　橋口　進（中島町中島）
（順不同・敬称略）

調査前風景（北西から）
（周辺橋脚工事の排土が盛られている）

北方丘陵谷部試掘調査

Ⅰ・Ⅱ区間の農道部分立会い調査

現地説明会のようす

第３章　調査の概要

第１節　地　　形

遺跡の現況は畑及び雑木林であった。地形は丘陵の谷部にあたり、遺跡はその裾部に立地する。かつて、この丘陵は現水田に向ってかなり張り出していたが、昭和37年の耕地整理以後、現在のように切りとられたようである。遺跡の現況での標高はＩ区は畑で約20.7mを測り、Ⅱ及びⅢ区は雑木林で北が約23.5m、南が約20mとゆるやかに南に傾斜し、南端で切られている。また、調査区の北上には町道が走っており、西から東に向って下っている。調査により検出された旧地形はⅡ・Ⅲ区においては同様に傾斜していたが、Ｉ区では北から南に傾斜し、調査区中央で東西に走る谷の小河川を確認した。

第２節　調 査 区

調査区は調査区を横断する現況の農道を挟んで、大きく３地区に分れる形式をとった。農道より東をＩ区とし、西側をⅡ・Ⅲ区とした。区割りは、調査区北方を東西に走る町道に並行する形で、Ｈ－４を基準として、４ｍ四方のグリッドを設定した（第５図参照)。南→北をアルファベット、東→西をアラビア数字で表記し、東南隅の杭名をグリッド名とした。

第３節　地　　層（第６・７図）

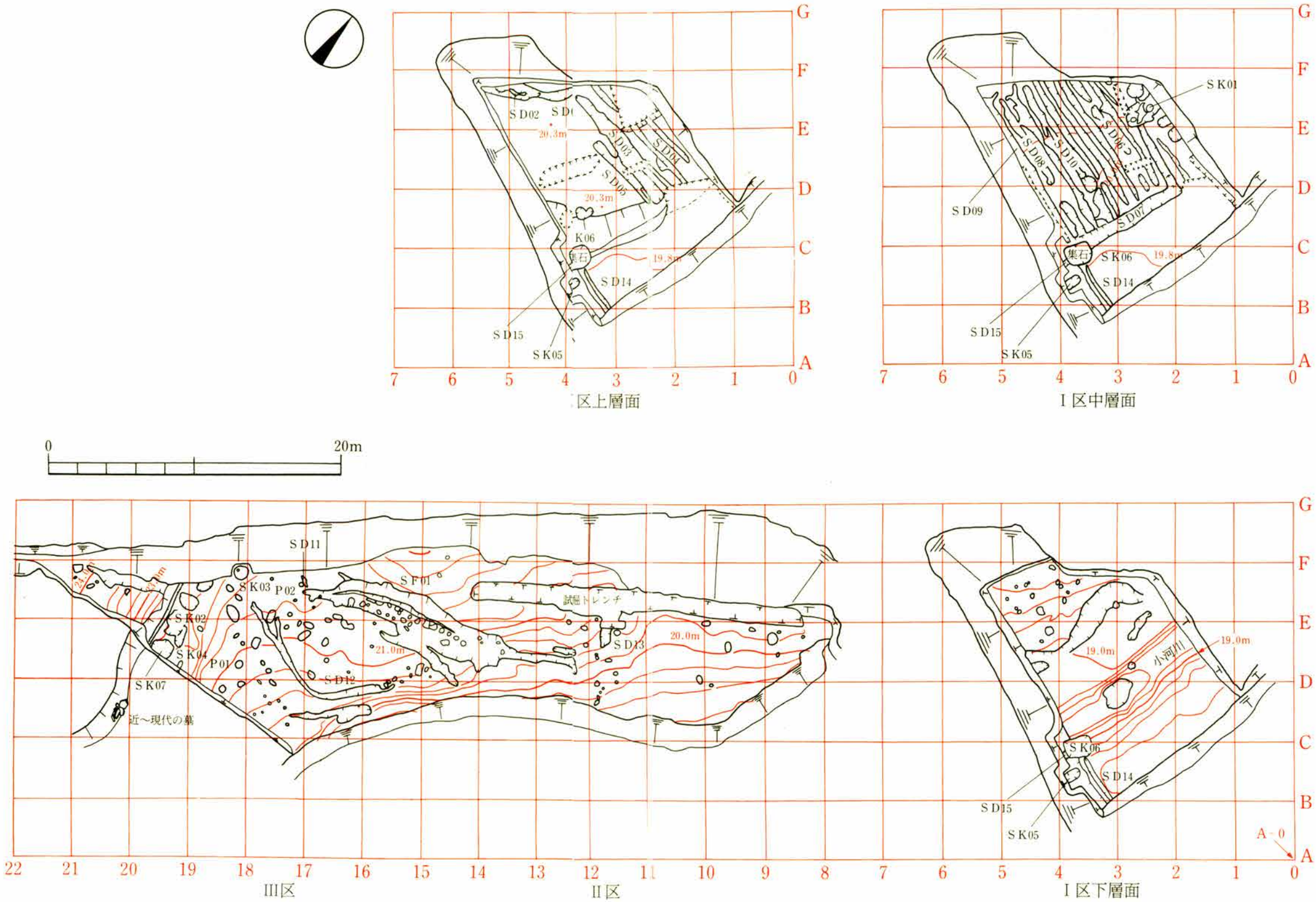
本遺跡が立地するのは丘陵の谷にあたるため、土層の堆積の変化が大きいので、Ｉ区とⅡ・Ⅲ区に分けて、それぞれで観察し判断した。土層の観察はＩ区では調査区東壁面、Ⅱ及びⅢ区は調査区北壁面でおこなった。

調査により検出した地山面の標高はＩ区は北端で約20mでゆるやかに南に傾斜し、深さ0.5mの谷を経て南端では約19.6mを測る。Ⅱ・Ⅲ区の検出した旧地形は谷にあたることから地山面は東西より落ち込み南にゆるやかに傾斜する。調査区北側の標高はⅡ区東端が約20.2m、Ⅲ区西端が約22mで、調査区のほぼ中央で落ち込みが深く標高は約21.5mを測り、南側では約19.6mである。

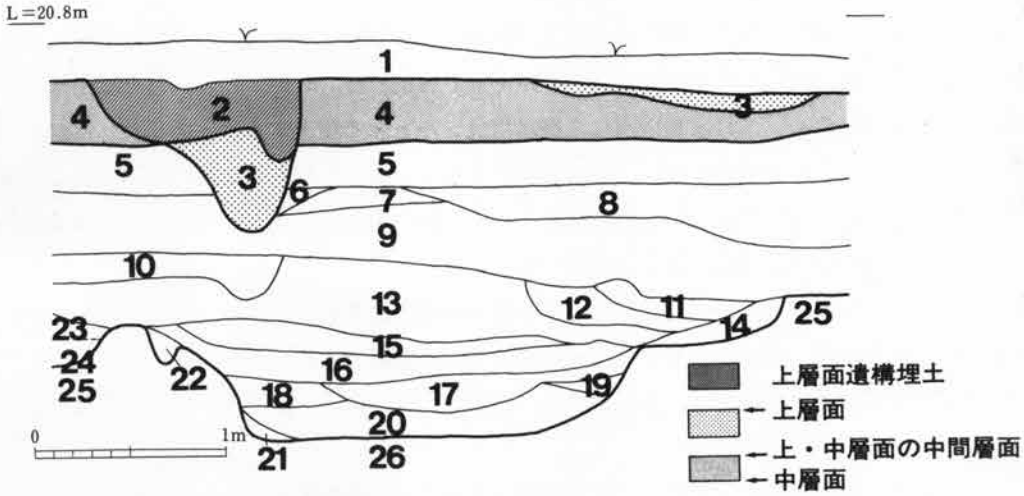
Ｉ区（第６図）は１層が耕作土、その下層の２層は上層面遺構の埋土で、上層面遺構は３層黄褐色地山ブロック多量混入暗褐色シルト上面において検出された。畑の畝溝を検出している。

この３層と下の４層黄褐色地山小ブロック混じり暗褐色シルトはそれぞれ盛土されたものである。これらはおそらく北側の丘陵斜面を掘削したもので、①表土を削って盛る②さらに地山を削って盛るという過程が確認できる。

次に、４層上面において遺構としてとらえることができるものが認められた。土坑（ＳＫ01）がそれにあたり、上層と中層面の中間層面と位置付けた。しかし、この遺構を検出できたのはその下の５層暗褐色～黒灰色シルト面においてである。

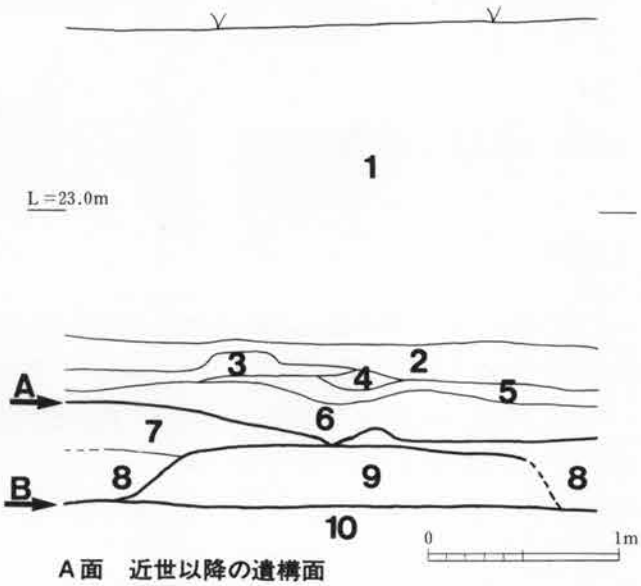


第5図　全体図・グリッド(4×4m)図（S＝1/300）



1．耕作土(暗褐色シルト質砂)
2．黄褐色地山小ブロック及び暗灰シルト少量含む暗褐色シルト　**上層遺構埋土**
3．**上層盛土**　黄褐色地山小ブロック多量混入暗褐色シルト
4．**下層盛土**　黄褐色地山小ブロック混じり暗褐色シルト
5．暗褐色～黒灰色シルト(炭粒・縄文土器含む)
6．暗褐色シルト＋黄褐色粗砂
7．黄褐色シルト
8．褐色シルト
9．暗褐色シルト
10．(暗)褐色シルト
11．灰色砂質シルト
12．灰色シルト質中粒砂　互層となる
13．乳灰色(シルト質)細砂
14．青灰色シルト(炭粒含む)
15．灰色粗砂
16．(暗)灰色砂質シルト
17．暗灰色粗砂～シルト
18．暗灰色シルト
19．暗灰色シルト(18層より暗い)
20．黒灰色粗砂～シルト
21．淡青灰色シルト多量混入暗灰色シルト
22．乳灰色シルト
（15～22：互層谷堆積（谷の小川））
23．(暗)乳灰色砂質シルト
24．(暗)乳灰色シルト質粗砂
25．黄褐色シルト(地山)
26．淡青灰色シルト(地山・25層が還元したもの)

第6図　Ⅰ区基本土層（S＝1/40）



A面　近世以降の遺構面
B面　近世前半以前の遺構面

1．黄褐色盛土(付近の地山を掘削した土)
2．黒褐色シルト 旧表土 土師器粒を含む
3．黄褐色軟岩の細ブロック(黒褐色シルト混じる)
4．2層と同じだが2層より淡い土師器粒を含む
5．3層と同じだが3層より黄褐色軟岩ブロックが小さい
6．3層と同じだが3層より黄褐色軟岩ブロックが大きい
7．暗褐灰色シルト
8．暗褐灰色シルト(7層より暗い)
9．黒褐色シルト
10．地山土(赤褐色シルトでその下層は黄色軟質岩)

第7図　Ⅲ区基本土層（S＝1/40）

そして、5層をベースとし、SK01に切られる遺構が中層面遺構である。これも上層遺構と同じく畑の畝溝を検出している他、土坑等も検出した。

また、5層には炭粒や縄文土器が含まれていたが、その下層7～8層においては遺構がみられなかったため、地山面にあたる25層黄褐色シルトまで掘削した。しかし、3区付近で遺構（SK06等）を検出したため、これより以南は9層暗褐色シルト面で調査することとした。だが、土層断面観察により、この遺構は耕作土付近から切込まれていることが判明したため、3区より南側及び東西方向を断ち割り調査した。その結果、11・12層の灰色系シルトより縄文時代の遺物が出土し、調査区ほぼ中央で谷の小河川を検出した。

このためSK06等の遺構を残し、それ以外の部分を地山まで掘り下げた。地山面で検出された遺構はピットと溝および谷の小河川で15～22層はその堆積層である。

Ⅲ区（第7図）の検出した地山面の標高は、北側が約21.5m、南側では約19.6mを測り、深いところで約2.5m掘り下げている。

1層は北側の町道拡幅による盛土で、黄褐色土を約1.5m前後盛っている。2層黒褐色シルトはそれ以前の旧表土である。

この2層下面において遺構を精査するが、面が十分にとらえられなかったこともあり、遺構は確認できなかった。

3～6層は整地土層とその土壌化したものである。

6層下面で遺構を精査したが確認できなかった。しかし、面として認識することができ、近世以降の面（A面）と思われる。7・8層は暗褐灰色系シルトで、遺構の覆土となり、肥前陶磁器の大橋編年[6]でいうⅠ～Ⅳ期の遺物を出土している。遺構は9層黒褐色シルト面（B面）から切込んでいたが、検出できたのは地山面においてである。

地山は赤褐色シルトであるが、その下層は黄色軟質岩で、この土を崩すと3～6層の黄褐色軟岩ブロックになる。

第4章　遺構と遺物

第1節　Ⅰ区の遺構と遺物

Ⅰ区は調査区を横断する農道を挟んだ東側約200㎡で、基本的に上層・中層・下層の3面において調査した。上層面遺構は黄褐色地山小ブロック多量混入暗褐色シルト層（上層盛土）で検出された。中層面遺構は暗褐～黒灰色シルト層で検出されたが、その内、この上層の黄褐色地山小ブロック混じり暗褐色シルト層（下層盛土）より切り込まれていた遺構が確認され、上層と中層の中間層面と位置付けた。下層面遺構は地山面で検出された遺構であるが、部分的に耕作土及び上層面より切り込まれていたものも確認した。

（1）**上層面**（第17・18・19・20図）

上層面の遺構は盛土された黄褐色地山小ブロック多量混入暗褐色シルト層（上層盛土）より検

出された。遺構面の標高は北側が約20.3mで約半分（D区）をすぎたあたりより南は上層盛土がされず緩やかに傾斜し、南端は約19.75mである。

検出された遺構は溝７条で、うち調査区西側で検出された北東－南西方向に走る溝５条（ＳＤ03～05他）は畑の畝溝と思われ、調査区に西隣する現在の畑とほぼ方向を同じくする。また、発掘調査時は下層面で検出した溝と土坑がこの面及びこれより上層の遺構と思われる。

【ＳＤ０１・０２】（第19図）

遺構　Ｅ－４区より検出。幅約0.6m、深さ約0.1mを測り、東西方向に流れる溝で、ＳＤ01と02は平行に走り東側で合流する。この溝は北側の丘陵からの流水を南下させない役割を果していたものと思われる。

遺物　ともに珠洲焼甕壺の破片とＳＤ01より土師器の摩滅片が出土している。

【ＳＤ０３・０４・０５】（第17・18・19・20図）

遺構　幅約0.3～0.5m、深さ約0.1～0.2mを測り、北東－南西方向に平行に走る。ＳＤ03は部分的にＳＤ05を切っている。畑の畝溝である。

遺物　珠洲焼甕壺、越前焼甕及び土師器の破片を出土している。

次に、以下の遺構は地山面（標高約19.5m）において検出されたが、調査区西壁断面観察の結果、上層面より掘り込まれていることが判明したものである。また、ＳＫ06は耕作土下面より掘り込まれていた。

【ＳＫ０５】（第20図）

遺構　Ｂ－３区にて検出。幅約0.65m、深さ約0.2mを測り、略長円形を呈する。

遺物（第８図）　２は須恵器の瓶類の口縁部で、色調は灰色を呈し、焼成は良い。３は肥前系磁器染付皿で口径13.8cmを測る。４は肥前系白磁器皿で底径４cmを測り、見込みには蛇の目状に釉剝ぎがみられる。また、高台には砂の熔着がみられる。時期は大橋編年[6]のⅣ期に相当すると考える。この他珠洲甕破片を出土している。

【ＳＤ１４】（第20図）

遺構　Ｂ－３区にて検出。幅約0.25m、深さ約0.1mを測り、北南に走る溝である。

【ＳＤ１５】（第20図）

遺構　Ｂ－３区にて検出。幅約0.5m、深さ約0.2mを測り、ＳＫ06に切られる溝である。

遺物（第８図）　６は珠洲焼鉢体部で色調は灰白色を呈し、二次焼成を受け軟質化している。おろし目は摩耗しており、確認できるのは２条である。

【ＳＫ０６】（第20図）

遺構　Ｂ・Ｃ－３区にて検出。径約1.6mの楕円形を呈し、深さ約0.4mを測る土坑である。約２・30cm角の石が底面全域で検出された。この遺構は調査区西壁断面の観察により上層の耕作土面より掘り込まれていることが確認された。また当初は石組井戸の石かと思われたが、出土した石をみると、大きさや形があまりに不揃いなため、井戸の石組に使用されたものではなく、周辺の不用な石を投棄したものと思われる。

遺物　埋土より明治30年銘の十銭銅貨１枚が出土している。

【上層面包含層出土遺物】(第８図)

７は珠洲焼の鉢体部で、色調は灰色を呈し、焼成は並で、粘土紐巻上げの痕跡が顕著である。おろし目は2.6cm幅で14本である。８は珠洲焼の甕口縁部である。色調は灰色を呈し、焼成は良い。また内面に降灰がみられる。時期は吉岡編年[7]のⅢ期でも末に相当すると考える。９・10はともに珠洲焼の甕破片で９の色調は灰白色で、焼成は並である。外面のタタキは3.9cm当り13本で綾杉状を呈し、内面には当て具痕が顕著に残る。10の色調は灰白色で焼成は良く、外面のタタキは３cm当り11本で綾杉状を呈する。11は珠洲焼壺を利用したいわゆる円板状陶製品で、短径は約３cmである。

（２）**中層面**（第21・22・23・24図）

中層面の遺構は暗褐～黒灰色シルト層より検出された。遺構面の標高は約20.0mである。

遺構は土坑及び溝で、検出された溝の内、北東－南西方向に走る溝は間隔が約0.3mとほぼ等しく整然と並ぶこと、深さが約0.1m程度と比較的浅いこと、上層面遺構及び東隣する現在の畑と方向をほぼ同じくすることより畑の畝溝と思われる。

【ＳＫ０１】(第９・23図)

遺構　Ｅ－２区より検出。径約１mの略円形を呈し、深さ約0.4mを測る土坑である。この土坑は北東－南西方向に走る溝を切り、また、調査区東壁断面観察で黄褐色地山小ブロック混じり暗褐色シルト層（下層盛土）より掘り込まれていることが確認されたため、上層と中層の中間層面の遺構と位置付けた。下面覆土は濁黄褐色シルトブロック多量混入の黒色シルトである。

遺物（第８図）　12は珠洲焼の鉢で口径20cmを測り、内面には水挽き痕が顕著である。色調は青灰色を呈し、焼成は良い。時期は吉岡編年[7]のⅠ期に相当し、その中でも末に位置付けられると考える。

【ＳＤ０６・０８・１０】(第23・24図)

遺構　幅約0.1～0.2m、深さ約0.1mを測り、北東－南西に走る溝で、畑の畝溝である。覆土は黄褐色地山小ブロック混じり暗褐色シルトである。

遺物（第８図）　それぞれ土師器片を出土している。ＳＤ08より出土した13は土師器碗で、色調は浅黄橙色を呈する。

【ＳＤ０７】(第22・24図)

遺構　幅約0.1m、深さ約0.2mを測り、東西に走る溝で、一部において北東－南西方向の溝を切っている。この溝は畑の区画割りを意識したものと思われる。

遺物　珠洲焼壺片が出土している。

（３）**下層面**（第25・26・27・28図）

下層面遺構は地山面より検出され、標高は北側の約19.95mから南に傾斜し、Ｄ・Ｃ区で溝を検出し、上端が約19.0mとなり、調査区南端では約19.6mを測る。検出された遺構は溝、ピットである。

【溝】(第25・26・27・28図)

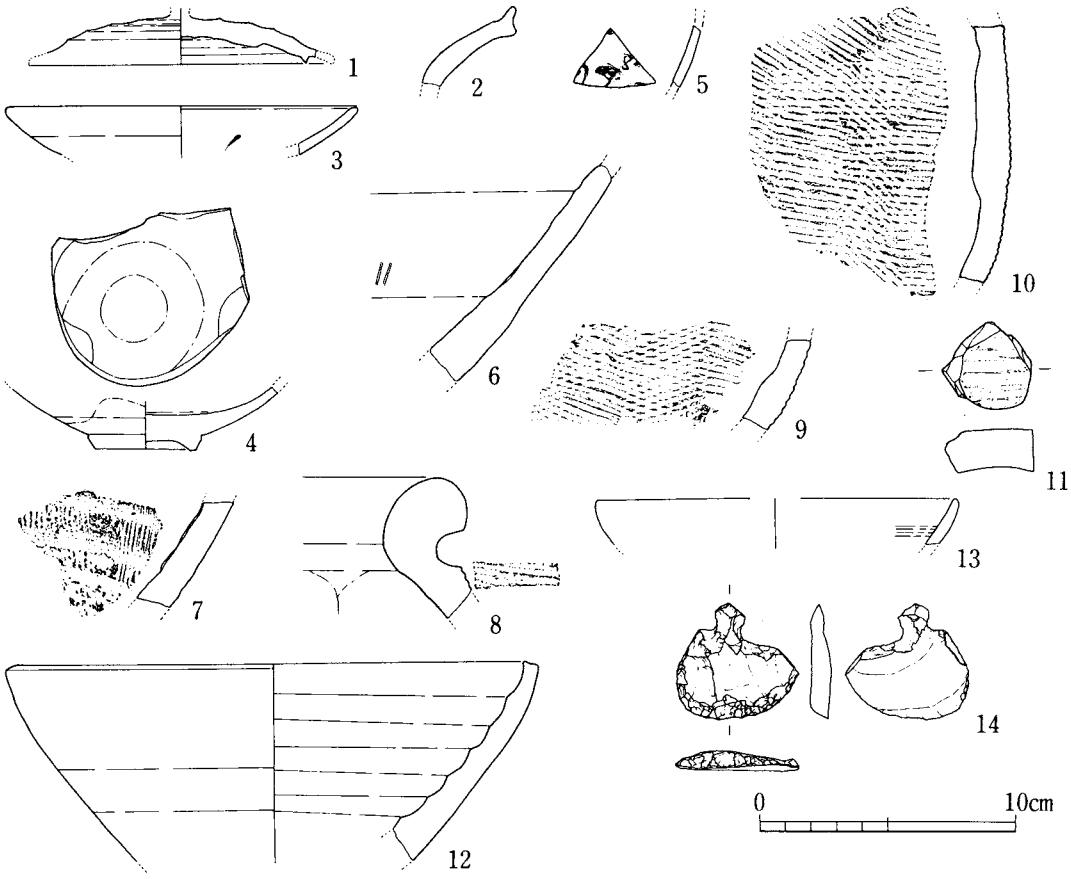
遺構　幅約3.5～4.5m、深さ約0.4～0.6mを測り、西→東に走る。また、底にはピット状の浅

い落ち込みも確認している。自然の谷地形による、小河川的なものと思われる。

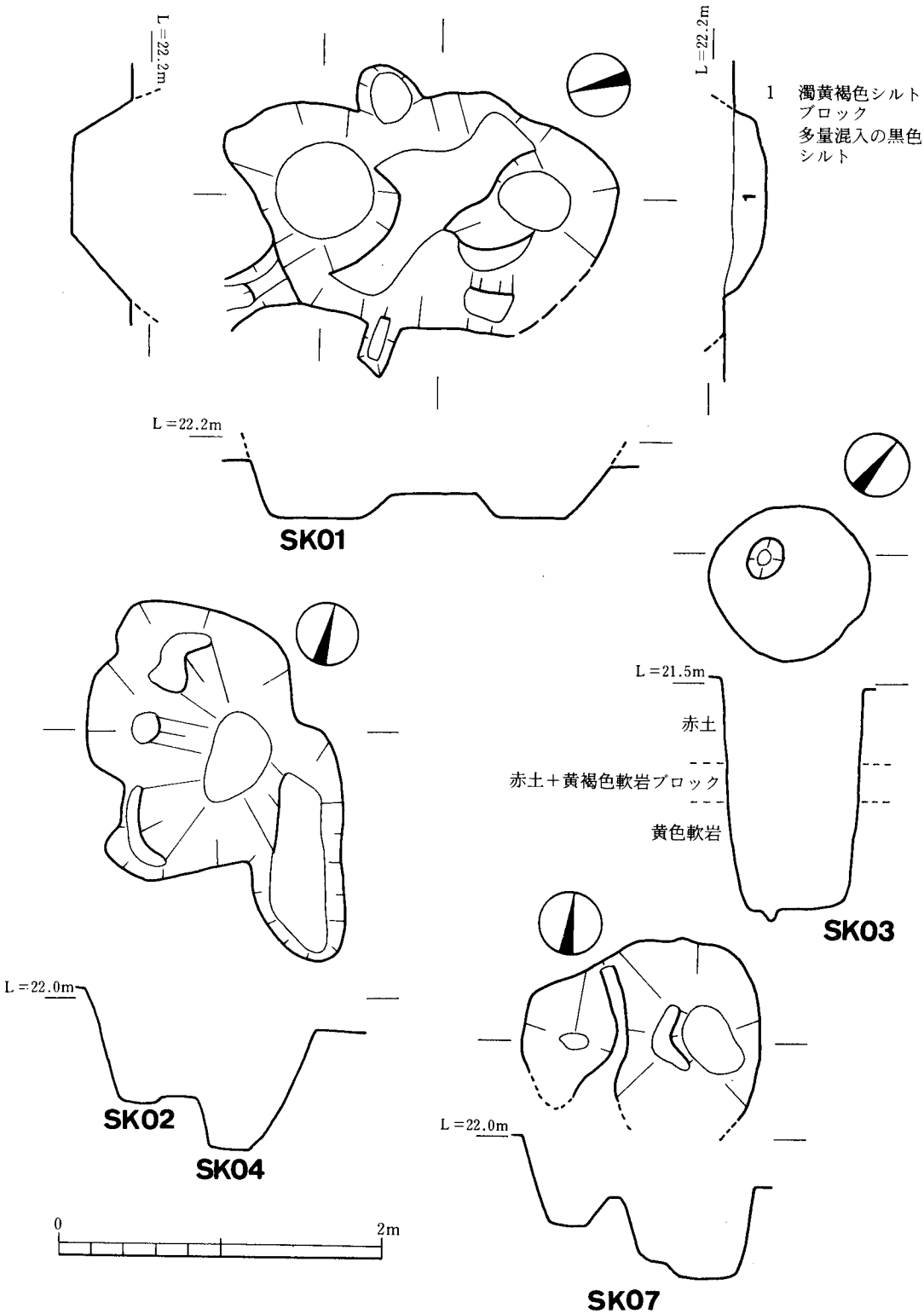
遺物（第８図）　灰色砂質シルト及び灰色シルト質中粒砂層より縄文土器片と14を出土している。14は横形の石匙である。ツマミ右端部から器体右側にそれぞれ一枚の大きな剥離面があることから、おそらくそれを打面とするような幅広の剥片が素材と思われる。その剥片の右側縁部に裏面から弧状に加工を施し、刃部を作り出している。ツマミ部はその反対側縁上部付近に表裏両面からノッチ状の加工を施し作り出している。全体の形状は左右非対称で左側が弧状をなし、左側端がやや尖りぎみとなっている。刃部は器体下端において左側縁に比べ、急角度の調整がなされ角度は約58度を計り、左側縁では比較的緩やかである。裏面には右端部にのみ小さな剥離が認められる。なお右側縁部の剥離面は調査時の傷である。器体表面は風化によりやや白っぽい色調を呈するが、フレッシュな面はやや青みを帯びた黒色を呈する。

（４）表採遺物（第８図）

５は中国（明）磁器染付碗で、二次焼成を受けている。文様は唐草文で、時期は16世紀前半～中頃と思われる。



第８図　北方丘陵谷部トレンチ調査及びＩ区出土遺物実測図（Ｓ＝1/3）



第９図　土坑・井戸実測図（S＝1/40）

第２節　Ⅱ及びⅢ区の遺構と遺物

Ⅱ及びⅢ区は調査区を横断する農道の西側約640㎡で、Ⅱ区は東寄り、11区辺りまでとし、Ⅲ区はこれより西側をいう。

（１）Ⅱ区の遺構と遺物

検出された遺構は東西に緩く落ち込む谷部と溝及びピットである。

【ＳＤ１３】（第31・32図）

遺構　Ｄ－11・12区にて検出。幅約0.7m、深さ0.15mを測る。

遺物（第10図）　11は肥前系磁器染付皿で、底径7.4cmを測り、高台畳付部分は無釉である。見込みには草状の文様が認められる。

（２）Ⅲ区の遺構と遺物

検出された遺構は土坑、溝およびピットである。

【ＳＫ０３】（第９・33・35図）

遺構　Ｅ・Ｆ－17・18区にて検出。径約１mの円形で、深さ約1.4mを測る。覆土はおよそ３層に分層でき、上層は暗灰色シルト、中層は黒褐色シルトで、下層は灰色砂質シルトであった。側壁から底部は上から赤土→赤土＋黄褐色軟岩ブロック→黄色軟岩と変化している。底からの湧水が激しく、二、三日で水が溢れ、また、側壁・底部が岩盤ということから、透き通った水であった。このことより、この遺構は井戸と考えられる。また、底にはわずかな凹みがある。

遺物（第10図）　１は上層上位から出土した越中瀬戸焼皿で底径６cmを測る。素地は灰色を呈し、焼成は良い。また、見込みには直接の重ね焼跡がみられる。時期は17世紀中頃と思われる。２は上層よりの出土で、唐津系陶器灰釉の建水と思われる。口径15.2cm、底径13.8cm、器高9.5cmを測る。色調は素地はにぶい赤褐色を呈し、釉は灰白色～オリーブ灰色で白濁しむらがある。調整は外面はヨコナデののちタタキが施され、内面には同心円文状当て具痕が認められる。施釉は口縁部は無釉であるが、外面は底部にまで施釉されている。口縁は無釉で合せ口による重ね焼の剝離痕がみられる。また釉は外面底部全体にも施されている。ＳＫ02出土遺物と接合。３は上層の上位より出土した唐津系陶器灰釉皿である。口径13.2cm、底径3.9cm、器高3.5cmを測る。色調は素地はにぶい黄橙色を呈し、釉は白濁し透明感がない。焼成は良い。見込みには胎土目痕が４個確認できる。４は上層中・下位より出土した唐津系陶器灰釉皿で、口径12.1cm、底径4.4cm、器高3.3cmを測る。色調は素地はにぶい黄橙色を呈し、釉は灰オリーブ色で透明感がある。焼成は良い。見込みには胎土目痕が３個確認できる。５は中層下面付近より出土した唐津系陶器灰釉皿で、口径10.6cm、底径3.4cm、器高3.0cmを測る。色調は素地は黄灰色～赤褐色を呈し、釉は灰オリーブ色で透明感にやや欠け、白濁している感がある。焼成は良い。見込みには草状文様の鉄絵がみられる他、胎土目痕が４個確認できる。また、口縁に煤の付着がみられ、灯明皿として使用していたものと思われる。以上２～５の唐津系陶器の時期として大橋編年[6]のⅠ期と考えられる。

【ＳＫ０２・０４】（第９・35図）

遺構　D・E－19区にて検出。不整方形の土坑で一辺約1.4m、深さはＳＫ02が約0.7m、ＳＫ04が約１mを測る。ＳＫ02がＳＫ04を切っている。

遺物（第10図）　ＳＫ02からの出土遺物は２の破片である。これはＳＫ03との接合資料である。ＳＫ04からの出土遺物は６の瀬戸美濃系陶器水注である。底径5.3cmを測り、色調は素地は淡黄色を呈し、釉は鉄釉で黒褐色で、底部は錆釉である。また底部は糸切りで、見込みはロクロナデ調整で、内面に刺突痕が認められる。

【ＳＫ０７】（第９・35・36図）

遺構　D－19区にて検出。楕円形を呈し、長辺約1.5m、短辺約１m程度、深さ0.5～0.9mを測る。

遺物　出土は認められなかった。

【ＳＦ０１】（第31・32・33・34図）

遺構　幅約1.2m、延長20mを測り、北西－南東方向に走る道状遺構である。方向は北西の丘陵に向って行くものと思われる。地山を段掘削し、底面及び側面は地山の黄色軟岩で硬質である。底面にて検出されたピットは径約0.4mの円形ないしは楕円形を呈し、0.5～0.7mのほぼ等間隔で確認され、深さは0.1mの±0.05m程度で比較的浅い。また、路面については堆積層に人為的要素が認められないこと、特に硬化面も確認されなかったため、検出した底面であると思われる。

また、D－13・14区（第24・25図ドット部分）にて焼土細ブロックの再堆積層を確認している。

遺物（第10図）　出土遺物は７・８ａ・９の他、唐津系銅緑釉陶器片、越前焼甕破片を出土している。７は珠洲焼壺底部で直線的な立上がりをもち、底径11.8cmを測る。色調は灰白色を呈し、焼成は並である。８ａはＰ02出土のｂと同一個体と思われ図上復元した。８は唐津系陶器灰釉皿で直口縁が中程で内側に屈折する。色調は素地は褐色を呈し、釉は灰オリーブ色でやや透明感に欠ける。焼成は良い。９は打製石斧の刃部で、自然石を素材とし石質は安山岩である。最大長10.2cm、最大巾11.0cm、最大厚2.8cm、重量439.7ｇを測る。周辺を加工して、剥離面を残す。また全体が摩滅している。

【ＳＤ１１】（第33図）

遺構　E－16・17区にて検出。幅約0.2m、深さ約0.05mで、東西に約１mを測る溝である。また、ＳＦ01に伴う凹みの可能性もあると思われる。

遺物（第10図）　10は肥前系磁器染付碗で、いわゆる一重網目文様が認められる。時期としては大橋編年[6]のⅢ期に相当すると考える。

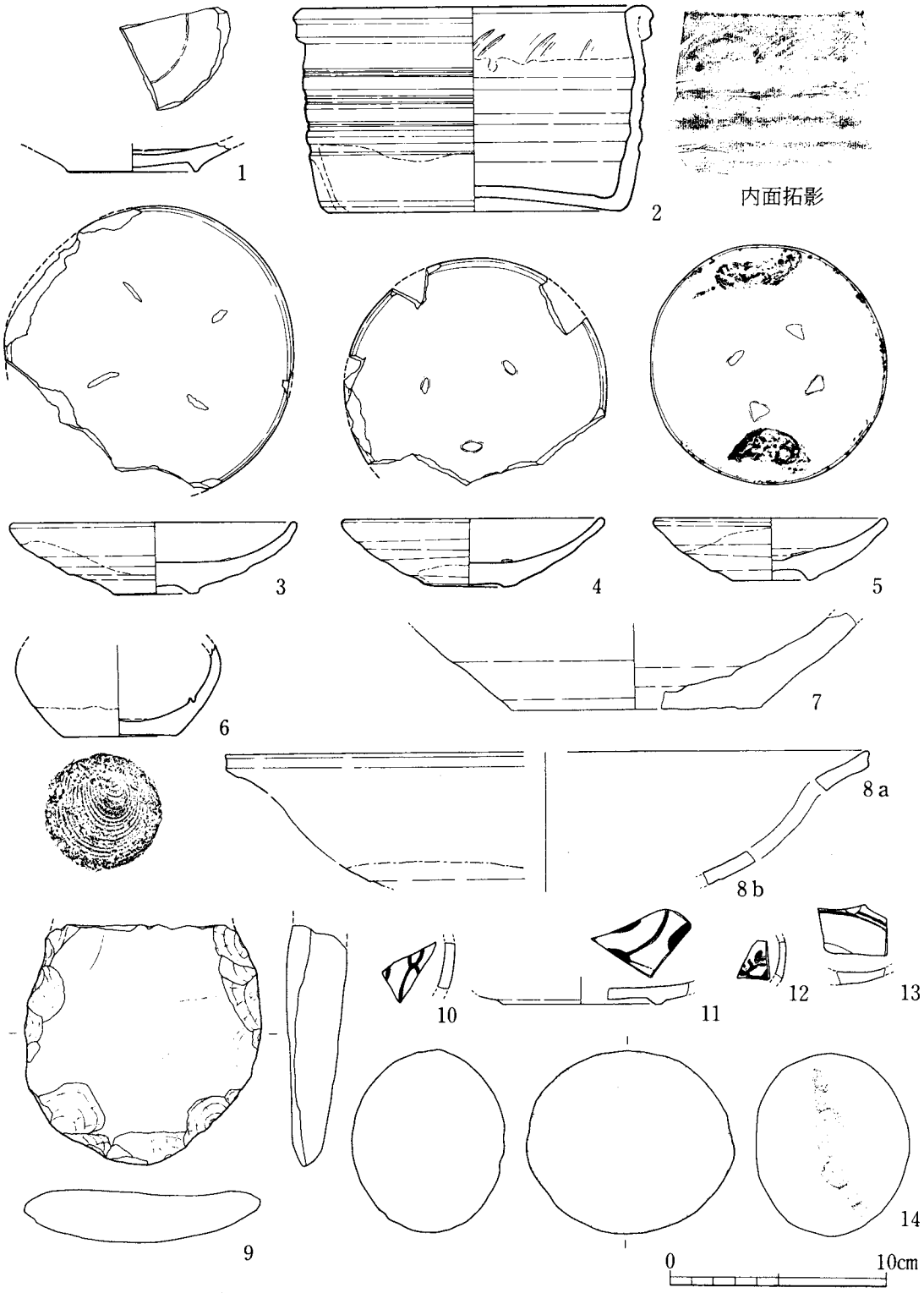
【ＳＤ１２】（第33・34図）

遺構　C－15・16・C・D・E－17区にて検出。幅約0.6～1.2m、深さ約0.1～0.2mを測り、北西－南東に向い東に折れるＬ字状を呈する溝で、底部には２・３cm程度の礫が詰っていた。

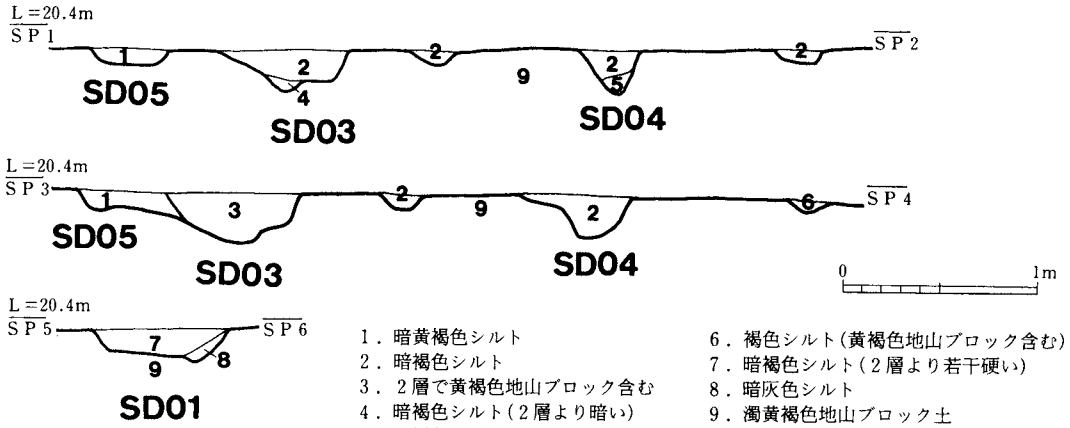
遺物　珠洲焼破片が出土している。

【Ｐ０１】（第36図）

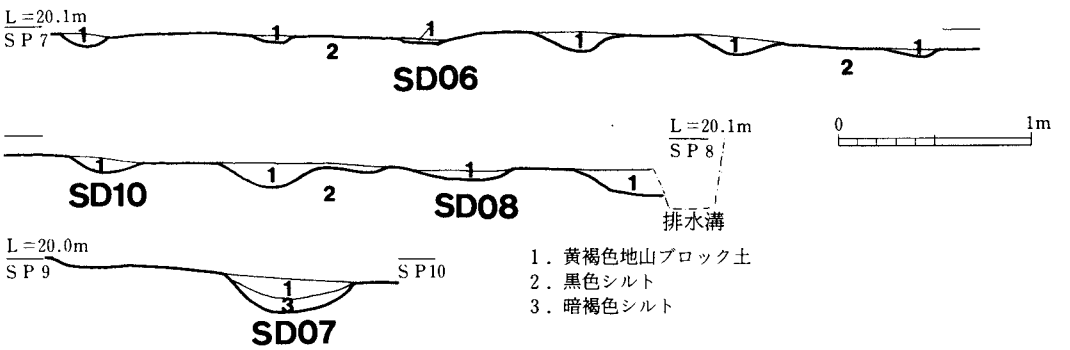
遺構　D－18区にて検出。幅約0.6m、深さ約0.1mを測る、略方形のピットで柱痕を確認した。掘り方よりプラスチックの出土があり現代の建築物に伴うものと思われる。



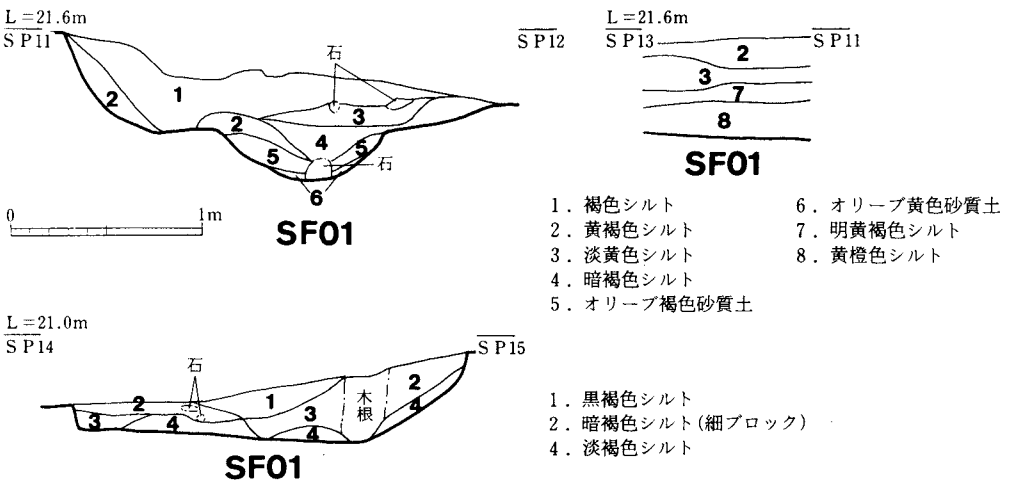
第10図　Ⅲ区出土遺物実測図（S＝1/3）



第11図　Ⅰ区上層面遺構断面実測図（S＝1/40）



第12図　Ⅰ区中層面遺構断面実測図（S＝1/40）



第13図　Ⅲ区遺構断面実測図（S＝1/40）

遺物　珠洲焼片とプラスチックが出土。

【Ｐ０２】(第33図)

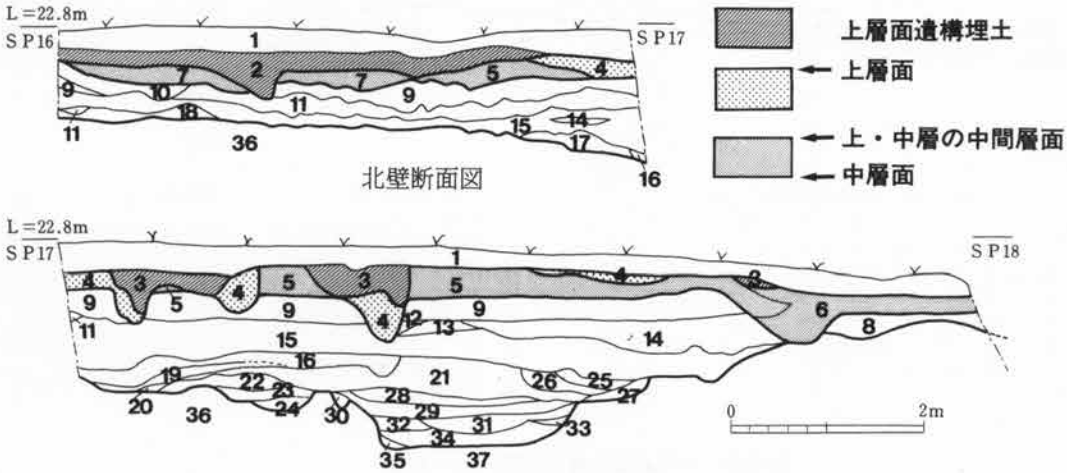
遺構　Ｅ－17区にて検出。幅約0.35m、深さ約0.1mを測る。略方形のピットで柱痕を確認した。

遺物（第10図）　８ｂの唐津系陶器皿片が出土した。ＳＤ12との接合資料。

また、Ｐ01と対をなすもの・Ｐ02と対をなすものの２個一対のピットを２組確認しているが、これらはＰ01と直線上に並ぶことから最近まで利用されていた畑に伴う建築物跡と思われる。(第33・34・35・36図)

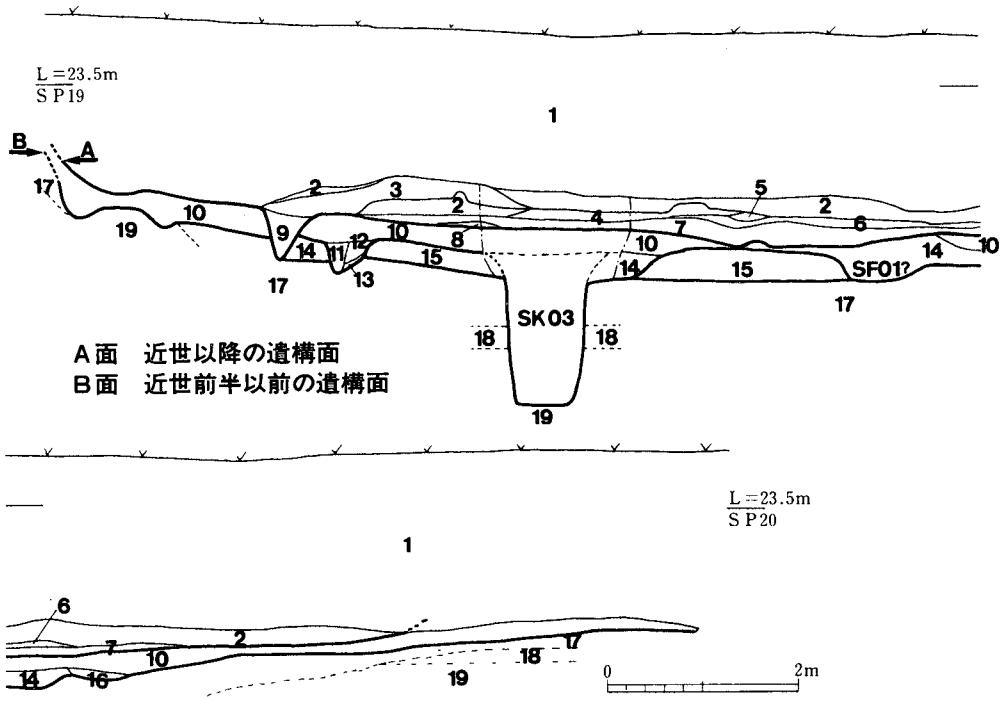
【Ⅲ区出土遺物】(第10図)

12はＤ・Ｅ－13・14区より出土した肥前系磁器染付碗である。13は耕土より出土した肥前系磁器染付皿である。14は排土より出土した磨石で自然石を素材とし石質は安山岩である。最大長9.6cm、最大巾8.5cm、最大厚7.2cm、重量723.7ｇを測る。両側面に敲打痕が認められ、また片面において使用による摩滅痕と思われるものが認められる。



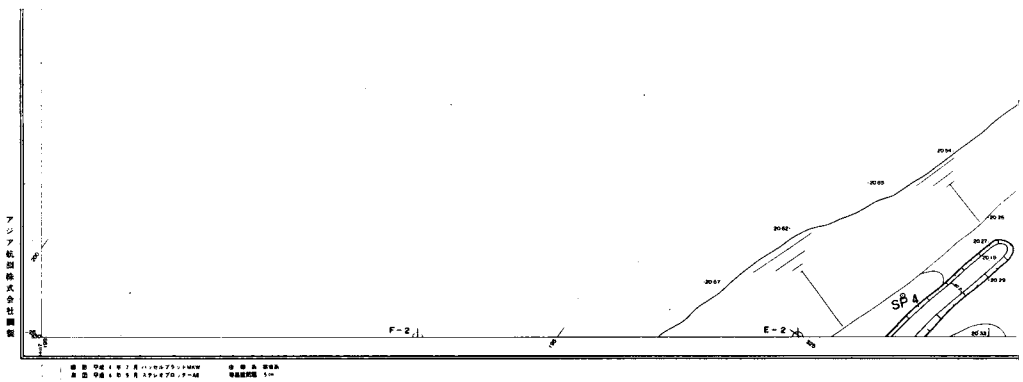
1．耕作土　褐灰色シルト質砂
2．１と同じだが１より暗い
3．黄褐色地山小ブロック及び暗灰シルト少量含む褐灰色シルト　} 上層遺構埋土
4．黄褐色地山小ブロック多量混入暗褐色シルト　**上層盛土**
5．黄褐色地山小ブロック層(暗褐色シルト混入)　**下層盛土**
6．暗褐色砂質シルト(地山粒・砂など多量混入)
7．暗褐灰色シルト
8．灰褐色シルト
9．暗褐色～黒灰色シルト(炭・縄文土器含む)
10．褐色シルト粒多量混入の暗褐灰色シルト
11．黒灰色シルト(９層より黒い)
12．暗褐色シルト(黄褐色粗砂混入)
13．黄褐色粗砂(地山ブロックが粗砂化したもの)
14．褐色シルト(炭粒含む)
15．暗褐色シルト
16．暗褐色シルト(地山粒含む)
17．14層よりやや明るい
18．15層より淡い
19．16層と同じだが黒色シルト粒を多く含み暗い
20．暗灰色シルト(地山粒・炭粒多量混入)
21．乳灰色シルト質細砂
22．灰色シルト(地山粒多量混入)
23．(暗)乳灰色砂質シルト
24．(暗)乳灰色シルト質粗砂
25．灰色砂質シルト
26．灰色シルト質中粒砂
27．青灰色シルト(炭粒含む)
28．灰色粗砂
29．(暗)灰色砂質シルト
30．乳灰色シルト
31．暗灰色粗砂～シルト
32．暗灰色シルト
33．32層より暗い
34．黒灰色粗砂～シルト
35．淡青灰色シルト多量混入暗灰色シルト　} 互層谷堆積(谷の小河川)
36．黄褐色シルト(地山)
37．淡青灰色シルト(地山　36層が還元したもの)

第14図　Ⅰ区北・東壁土層断面図（Ｓ＝1/80）

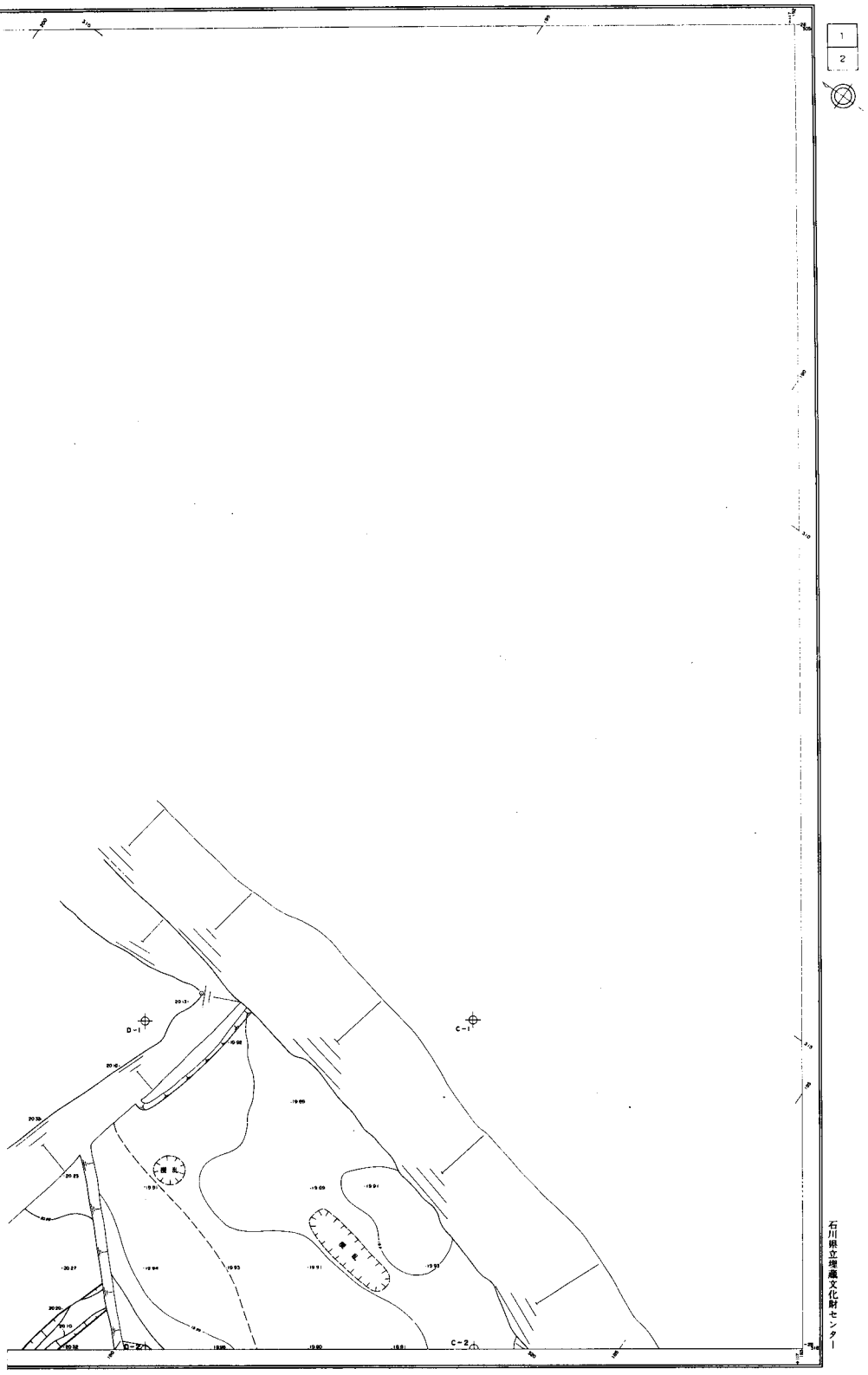


1．黄褐色盛土(付近の地山を掘削した土)
2．黄褐色シルト　旧表土　土師器含む
3．黄褐色軟岩の細ブロック層(盛土)
4．黄褐色軟岩の細ブロック(黒褐色シルト混じる)
5．2層と同じだが2層より淡い　土師器粒含む
6．4層と同じだが黄褐色軟岩ブロックが小さい
7．4層と同じだが黄褐色軟岩ブロックが大きい
8．黄褐色軟岩ブロック層
9．乳灰色シルト
10．暗褐灰色シルト(9層に近い)
11．黄褐色軟岩の細ブロック混じり黒褐色シルト
12．灰褐色シルト
13．暗灰褐色シルト
14．10層より暗い
15．黒褐色シルト
16．11層よりやや暗く、石(拳大以上)多い
17．赤土
18．赤土＋黄色軟岩ブロック　} 地山
19．黄色軟岩

第15図　Ⅲ区北壁土層断面図（S＝1/80）

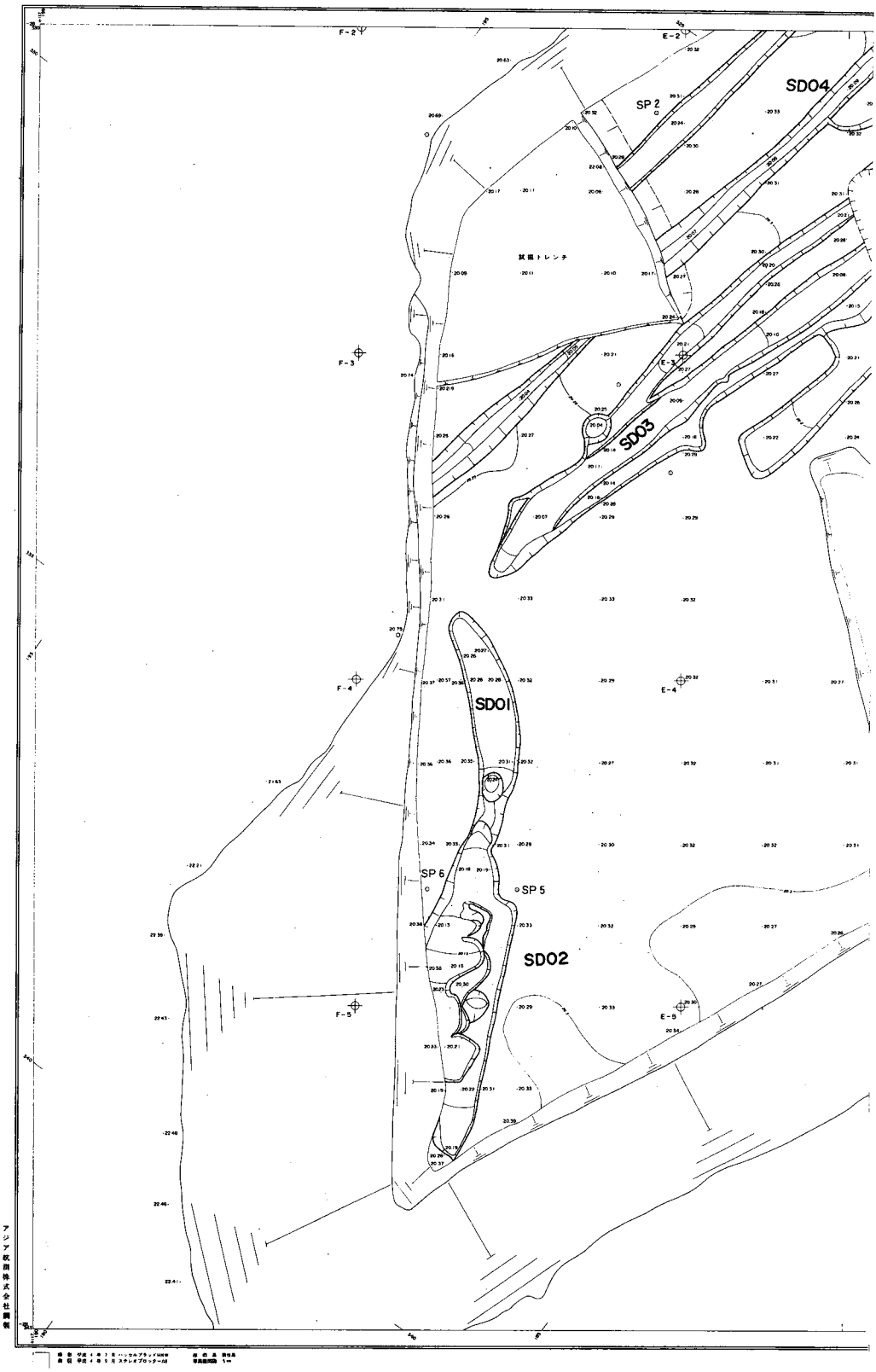


第17図　Ⅰ区上層面遺構平面図(1)（S＝1/80）

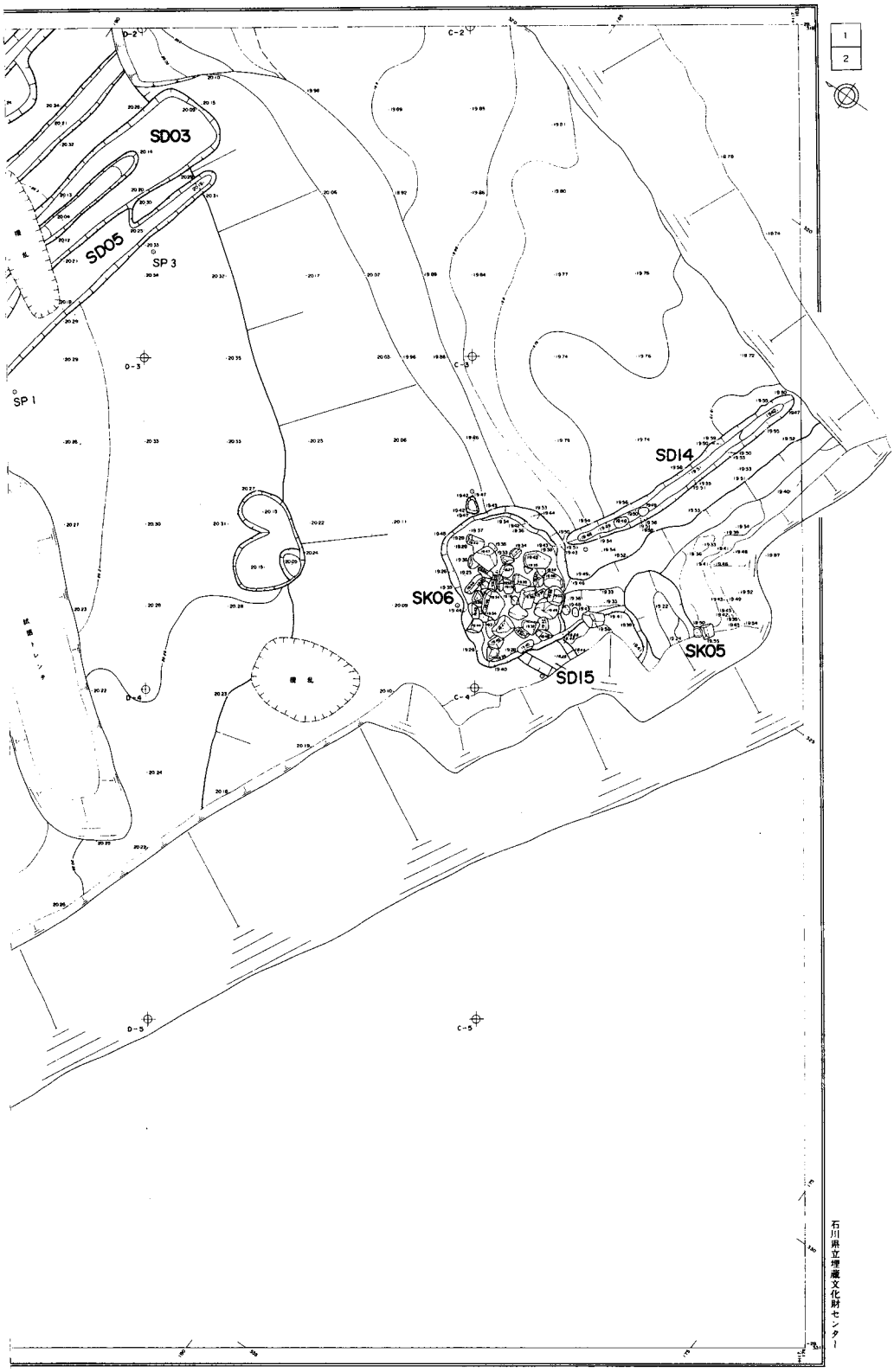


石川県立埋蔵文化財センター

第18図　Ⅰ区上層面遺構平面図(2)（S＝1/80）

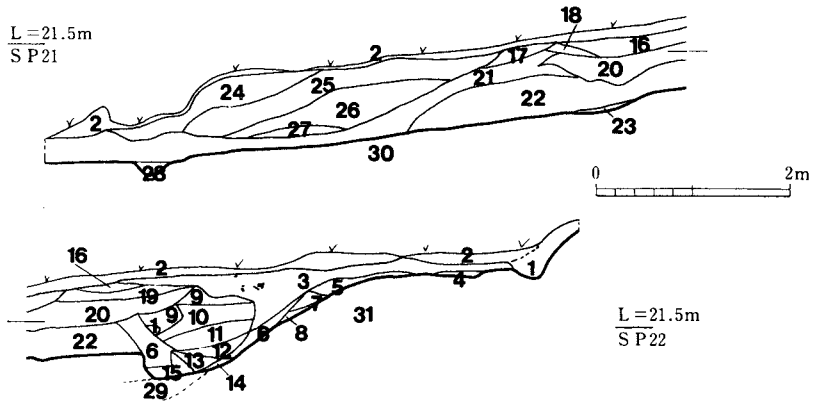


第19図　Ⅰ区上層面遺構平面図(3)（S＝1/80）



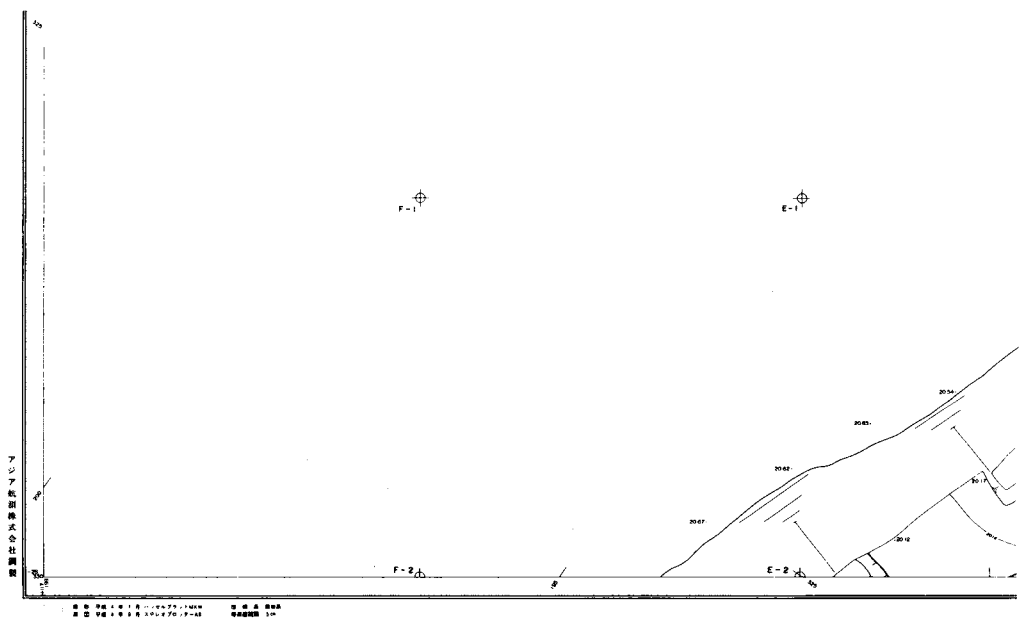
石川県立埋蔵文化財センター

第20図　Ⅰ区上層面遺構平面図(4)（S＝1/80）

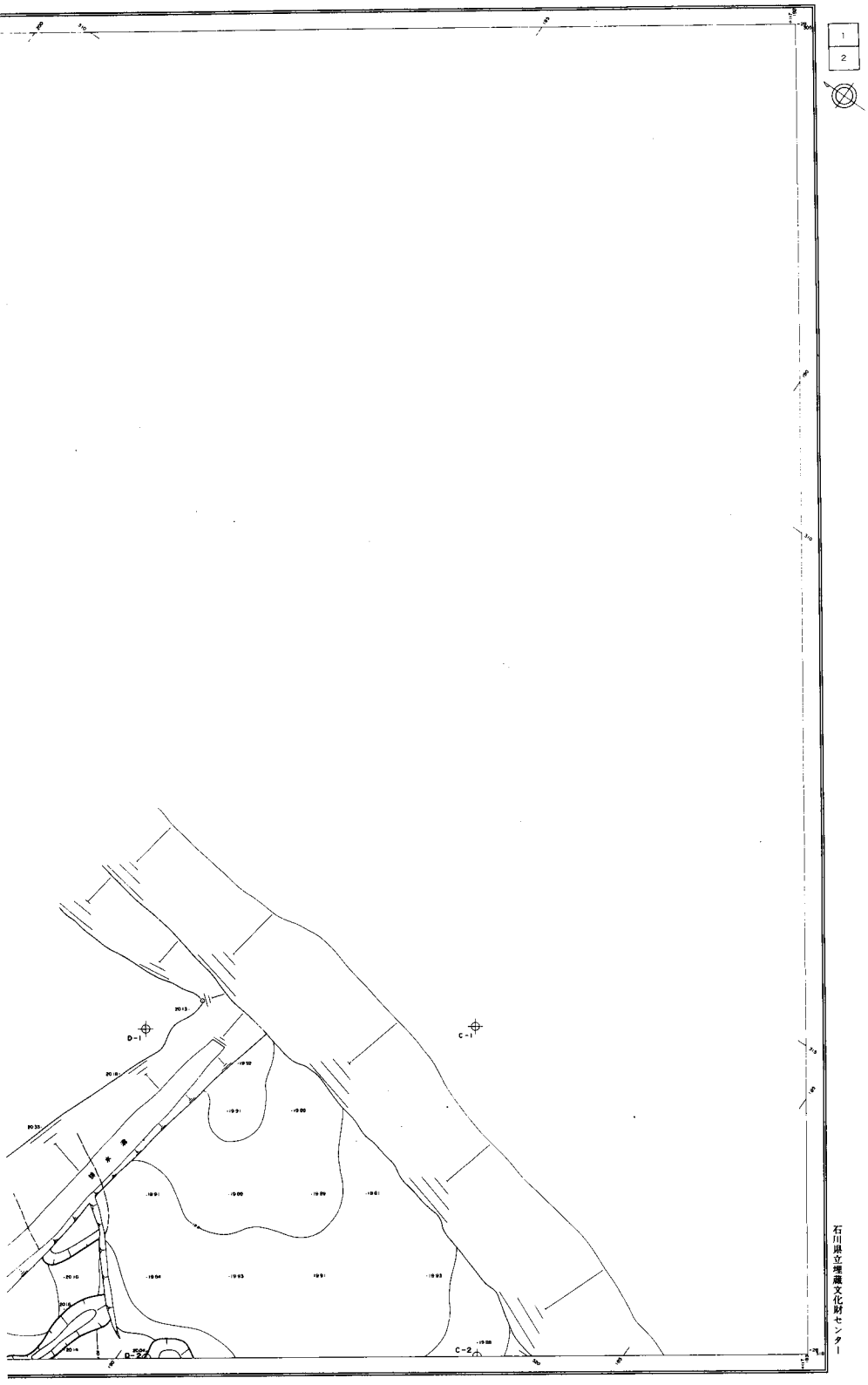


1．暗褐灰色シルト
2．濁黄褐色軟岩細ブロック混入の1層
3．暗褐灰色シルト（1層より明るい）←北断面の2層と対応か
4．黄褐色軟岩細ブロック多量混入灰シルト
5．黄褐色軟岩の風化土
6．淡黒灰色シルト
7．黄褐色軟岩ブロック混じり赤褐色シルト（赤土）
8．赤褐色シルトまじり黄褐色軟岩ブロック層
9．濁赤褐色シルト
10．黄褐色軟岩ブロック混じり9層
11．10層よりブロック多く、やや暗い
12．黄褐色軟岩ブロック多量混入の9層
13．黄褐色軟岩ブロック多量混入の乳黄灰色シルト
14．10層と同じだが10層より軟らかい
15．乳黄灰色シルト
16．黄褐色軟岩ブロック層
17．暗褐色シルト（軟らかい）
18．暗褐色シルト（17層よりしまりよい）
19．黄褐色粒混じり暗褐灰色砂質シルト
20．暗褐色シルト（軟らかく、ぼそぼそ、炭含む）
21．黄褐色軟岩ブロック混じりの20層
22．淡黒褐色シルト（軟らかい）
23．22層多量混入赤褐色シルト
24．黄褐色軟岩ブロック層（暗褐色シルト・暗褐灰色シルトが混じる）
25．黄褐色軟岩ブロック層（24層より暗褐色シルト・暗褐灰色シルトが多い）
26．黄褐色軟岩ブロック層（24・25層より純粋で黄色強い）
27．26層混じり、淡黒褐色シルト
28．赤褐色シルト粒混じり暗褐色シルト
29．15層混じり黄褐色軟岩ブロック層
30．赤土 ｝地山
31．黄色軟岩 ｝地山

第16図　Ⅲ区西壁土層断面図（S＝1/80）

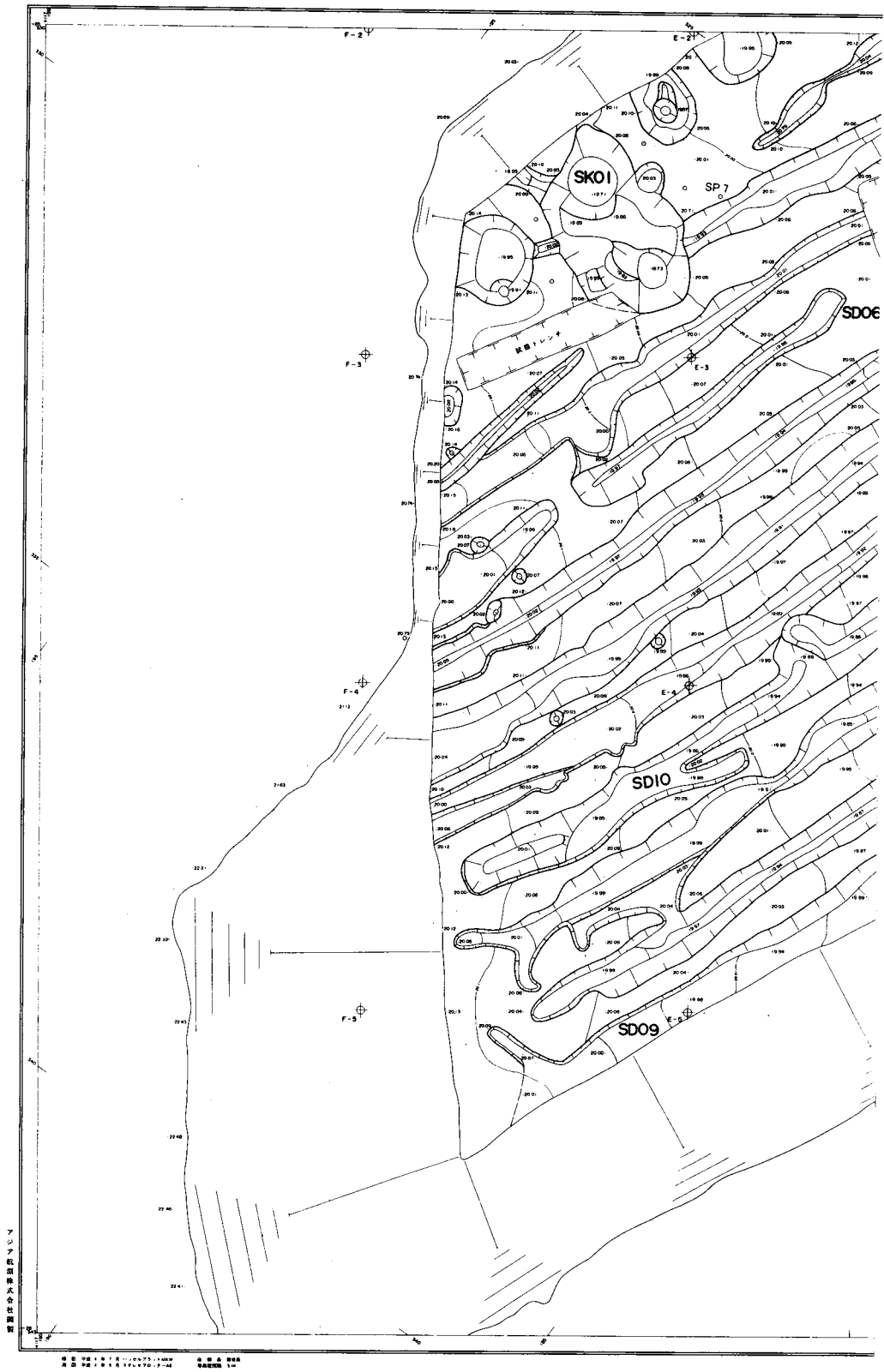


第21図　Ⅰ区中層面遺構平面図(1)（S＝1/80）

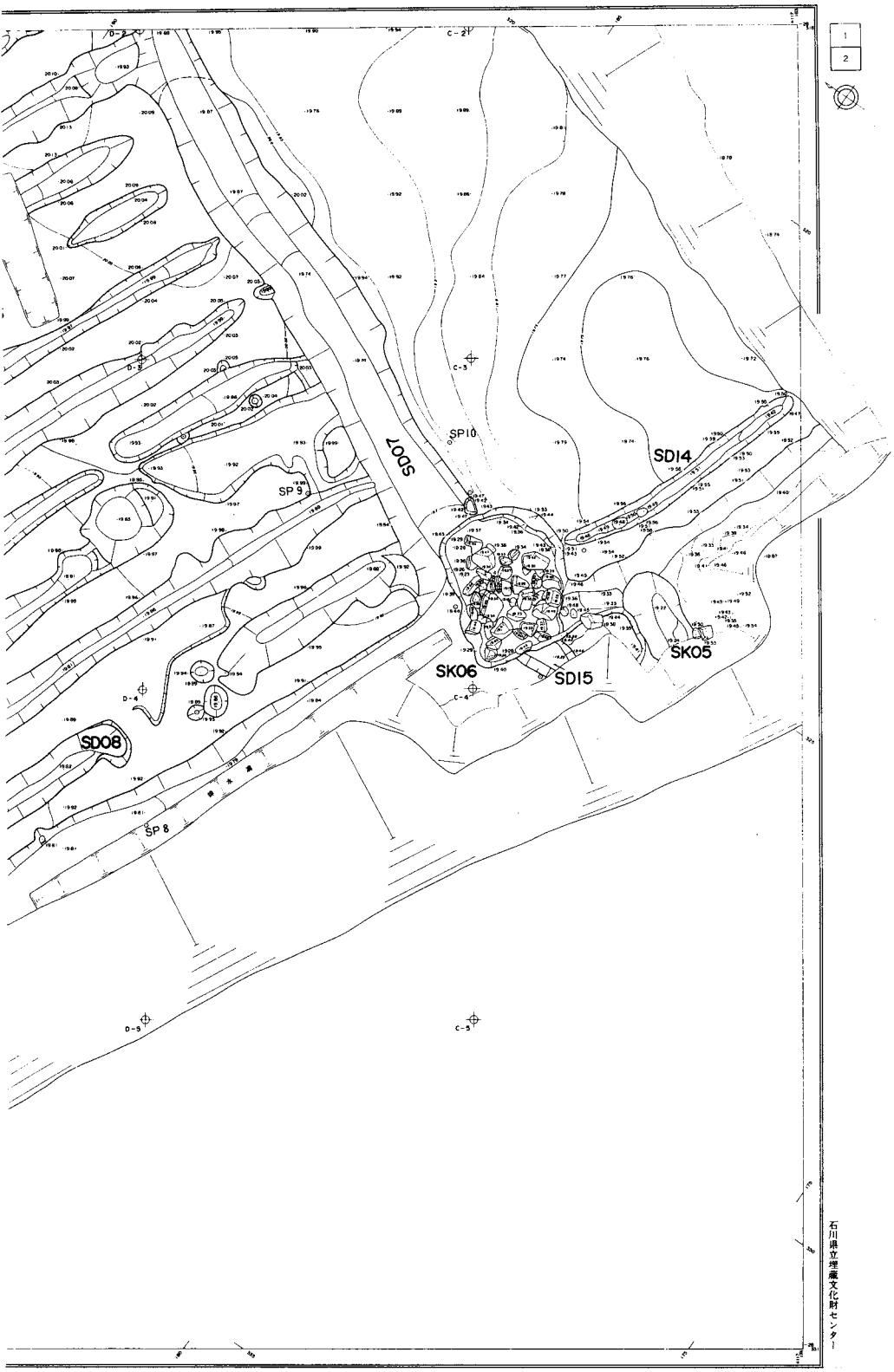


石川県立埋蔵文化財センター

第22図　Ⅰ区中層面遺構平面図(2)（S＝1/80）

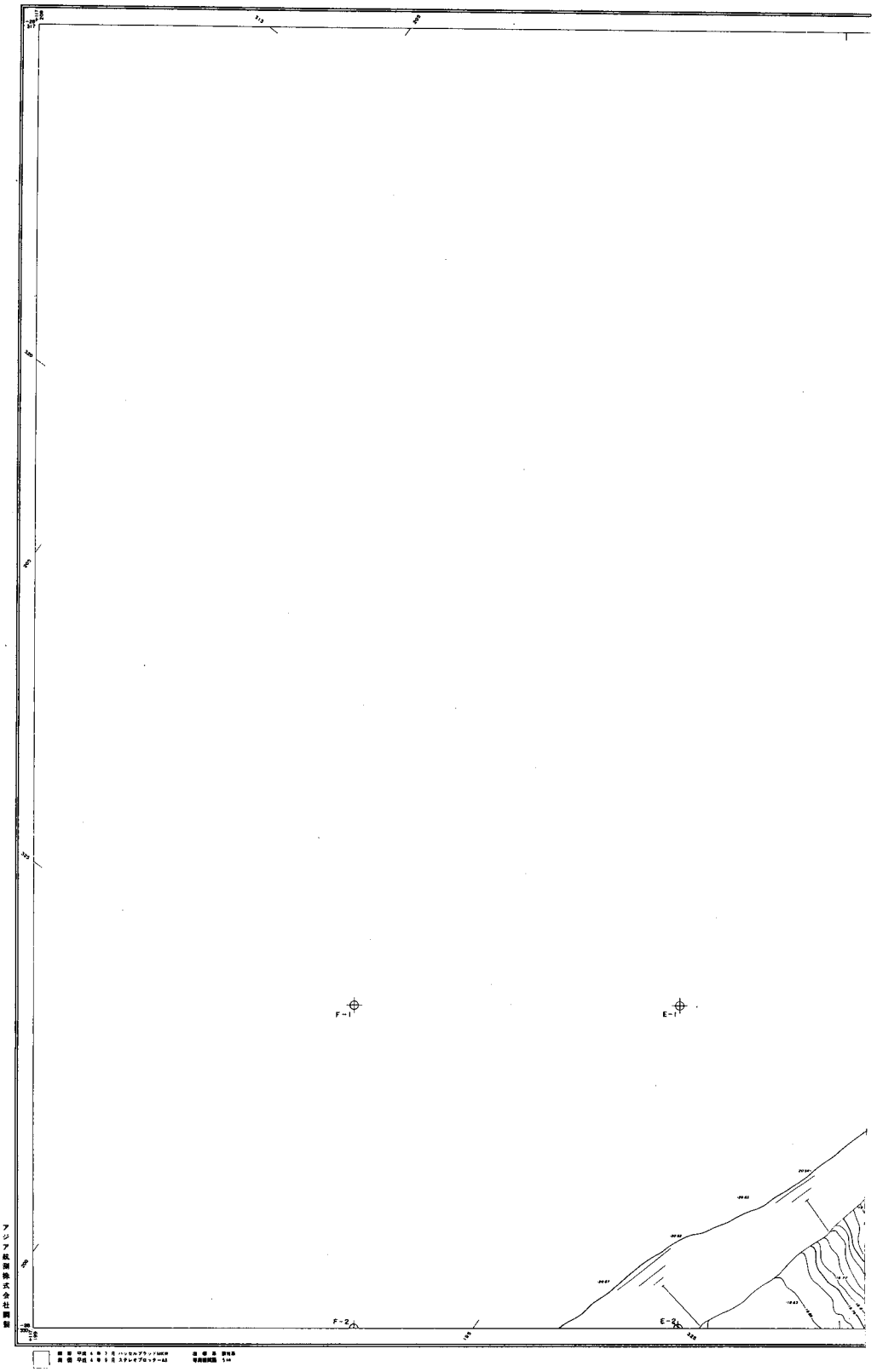


第23図　Ⅰ区中層面遺構平面図(3)（S＝1/80）

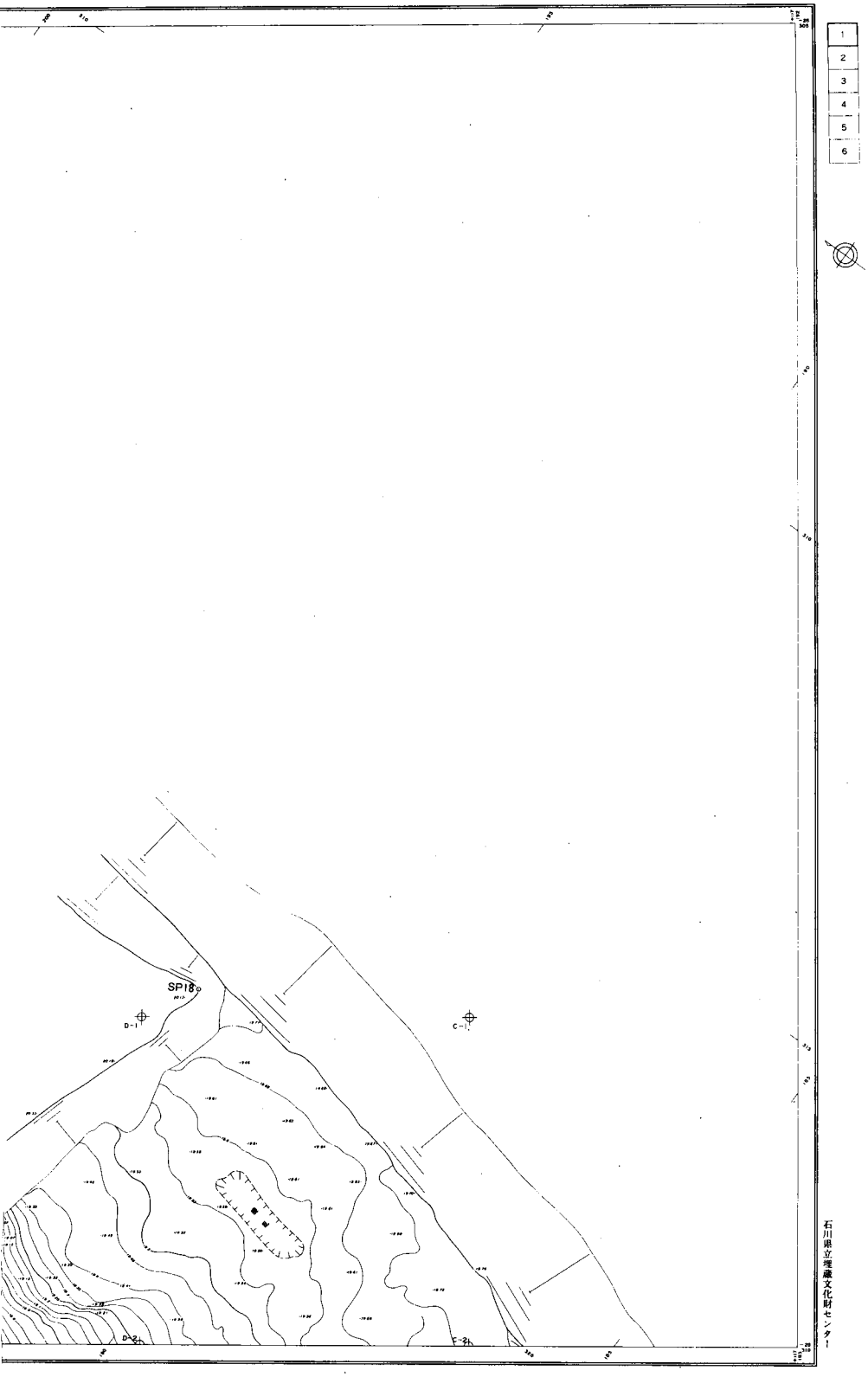


石川県立埋蔵文化財センター

第24図　Ⅰ区中層面遺構平面図(4)（S＝1/80）

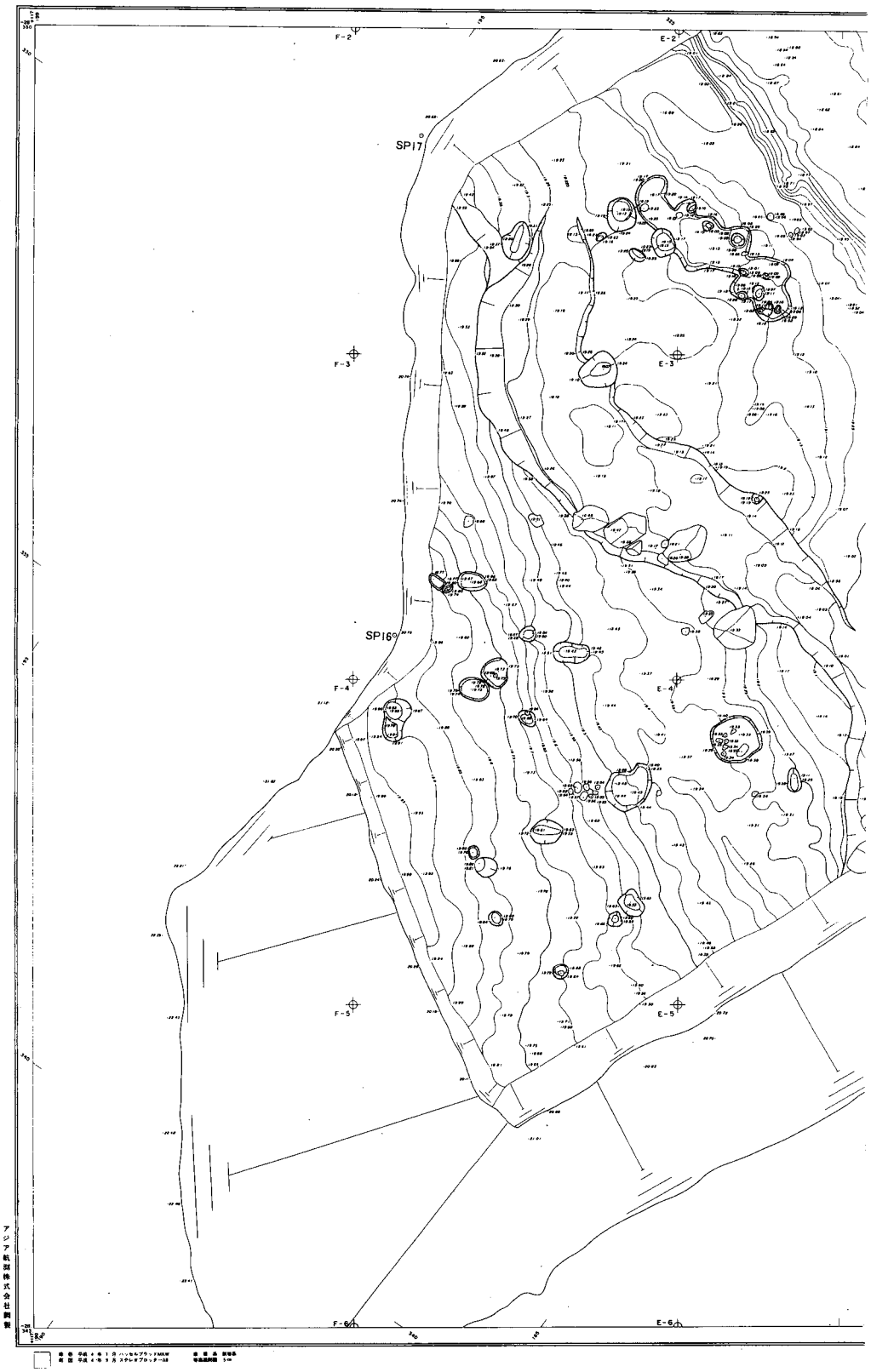


第25図　Ⅰ区下層面遺構平面図(1)（S＝1/80）

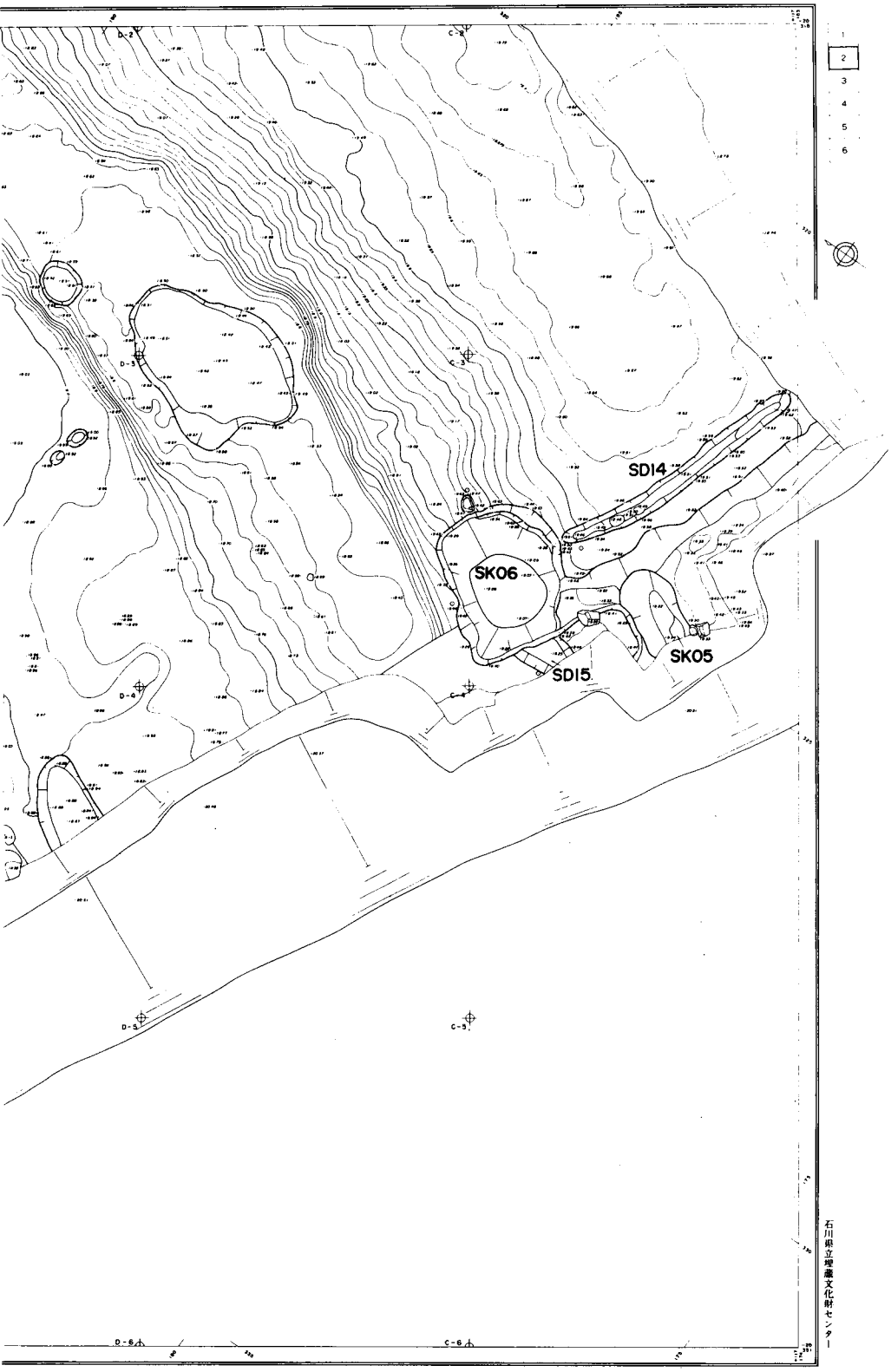


石川県立埋蔵文化財センター

第26図　Ⅰ区下層面遺構平面図(2)（S＝1/80）

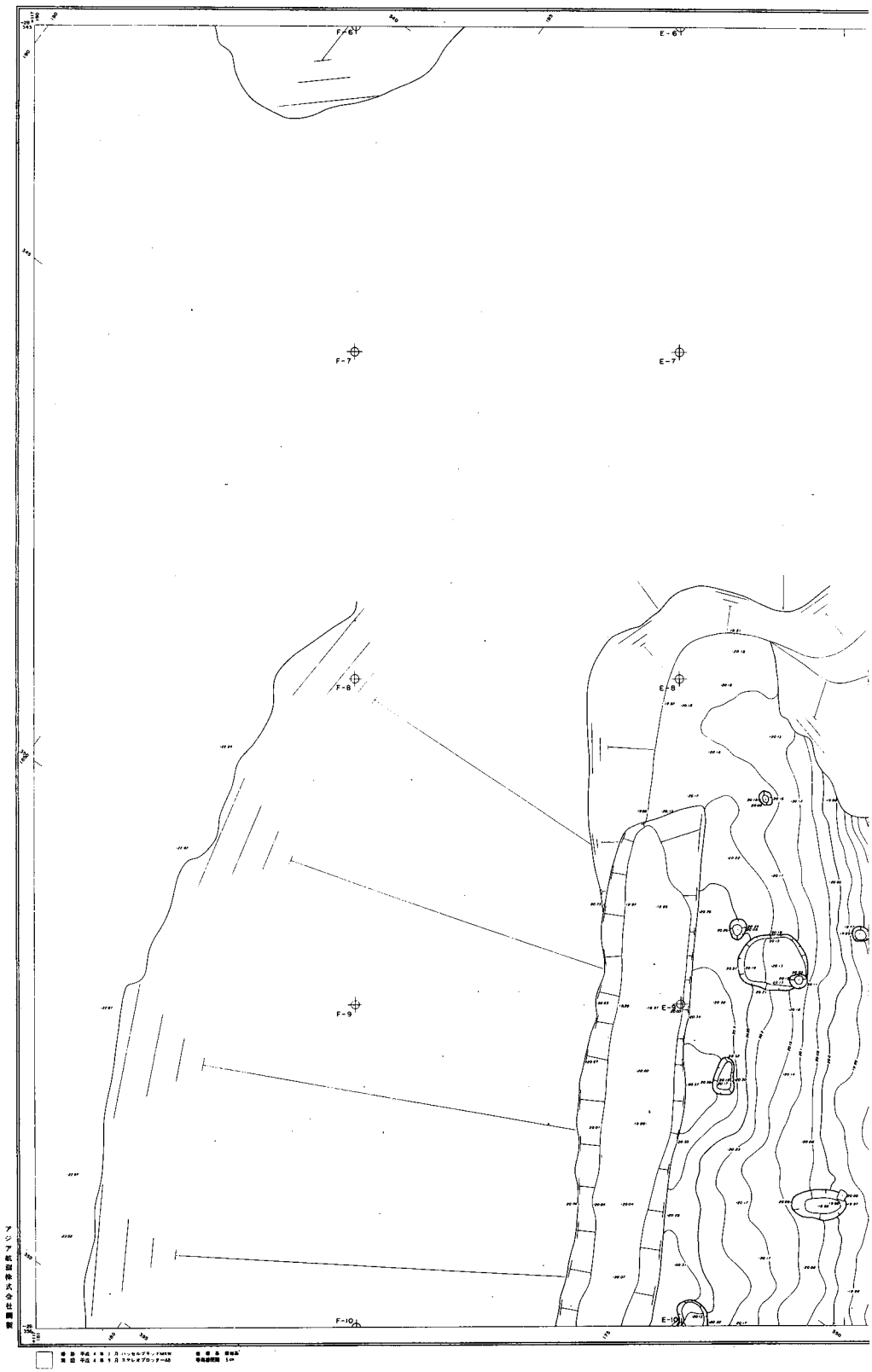


第27図　Ⅰ区下層面遺構平面図(3)（S＝1/80）

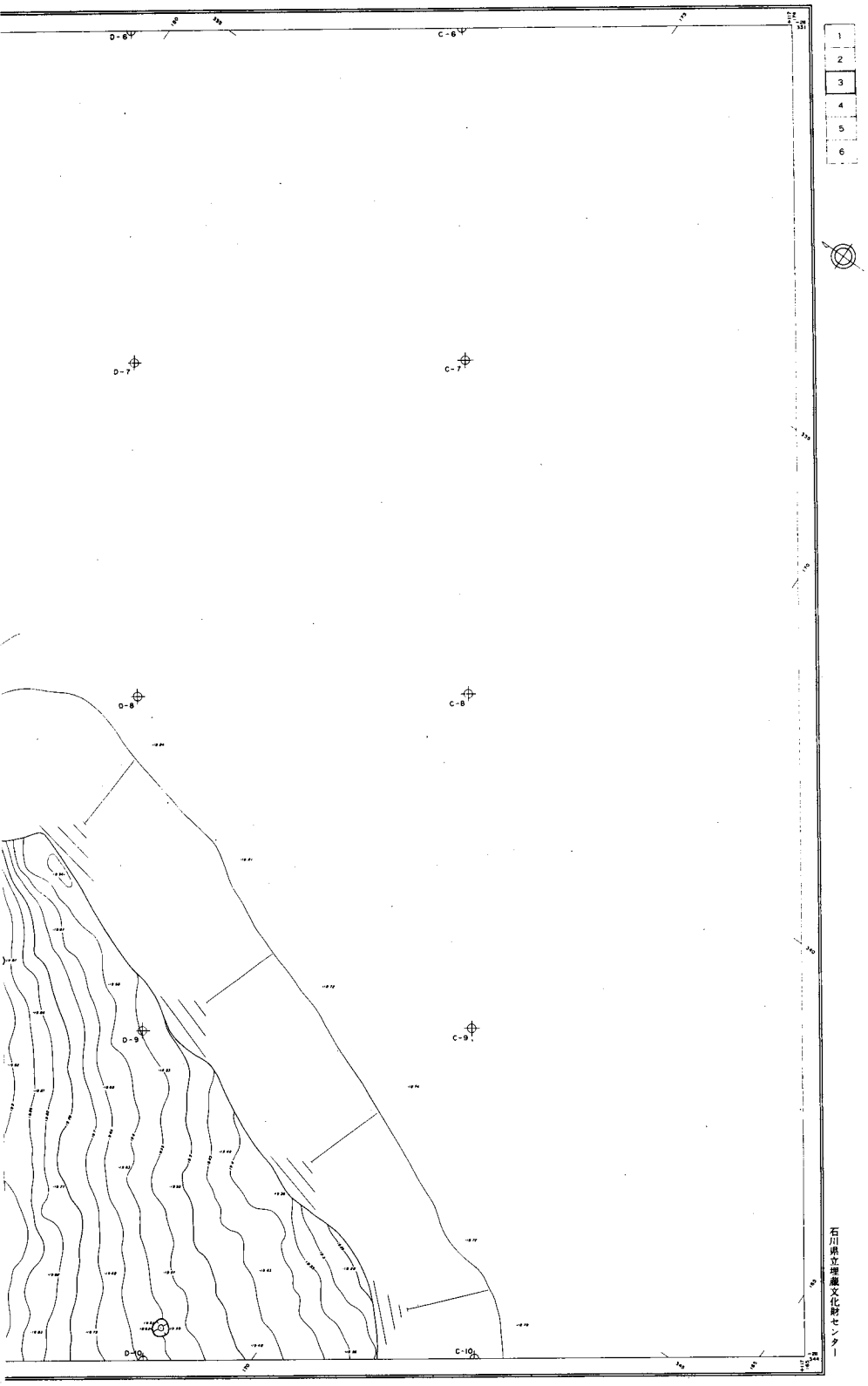


石川県立埋蔵文化財センター

第28図　Ⅰ区下層面遺構平面図(4)（S＝1/80）

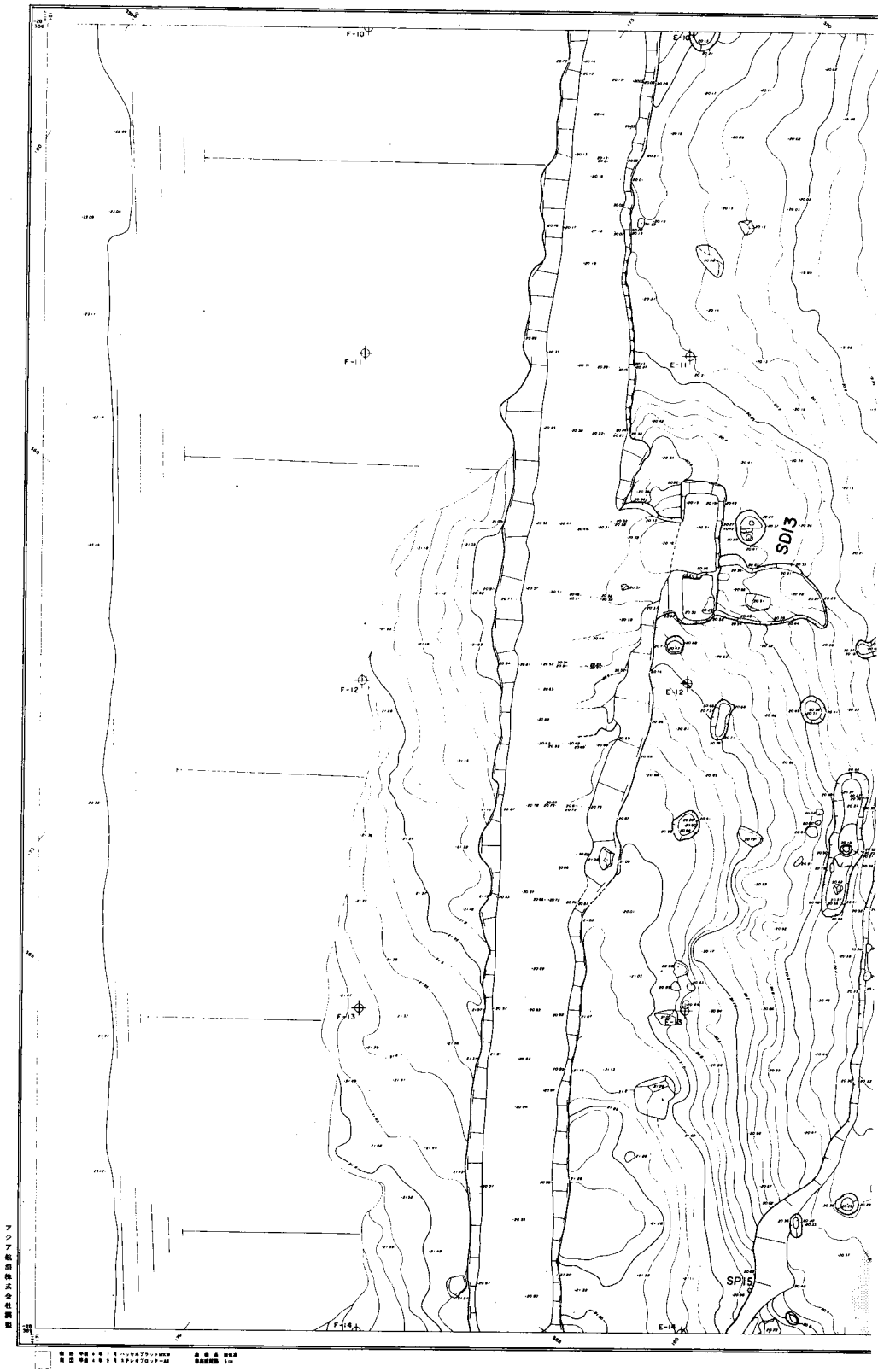


第29図　II区遺構平面図(1)（S＝1/80）

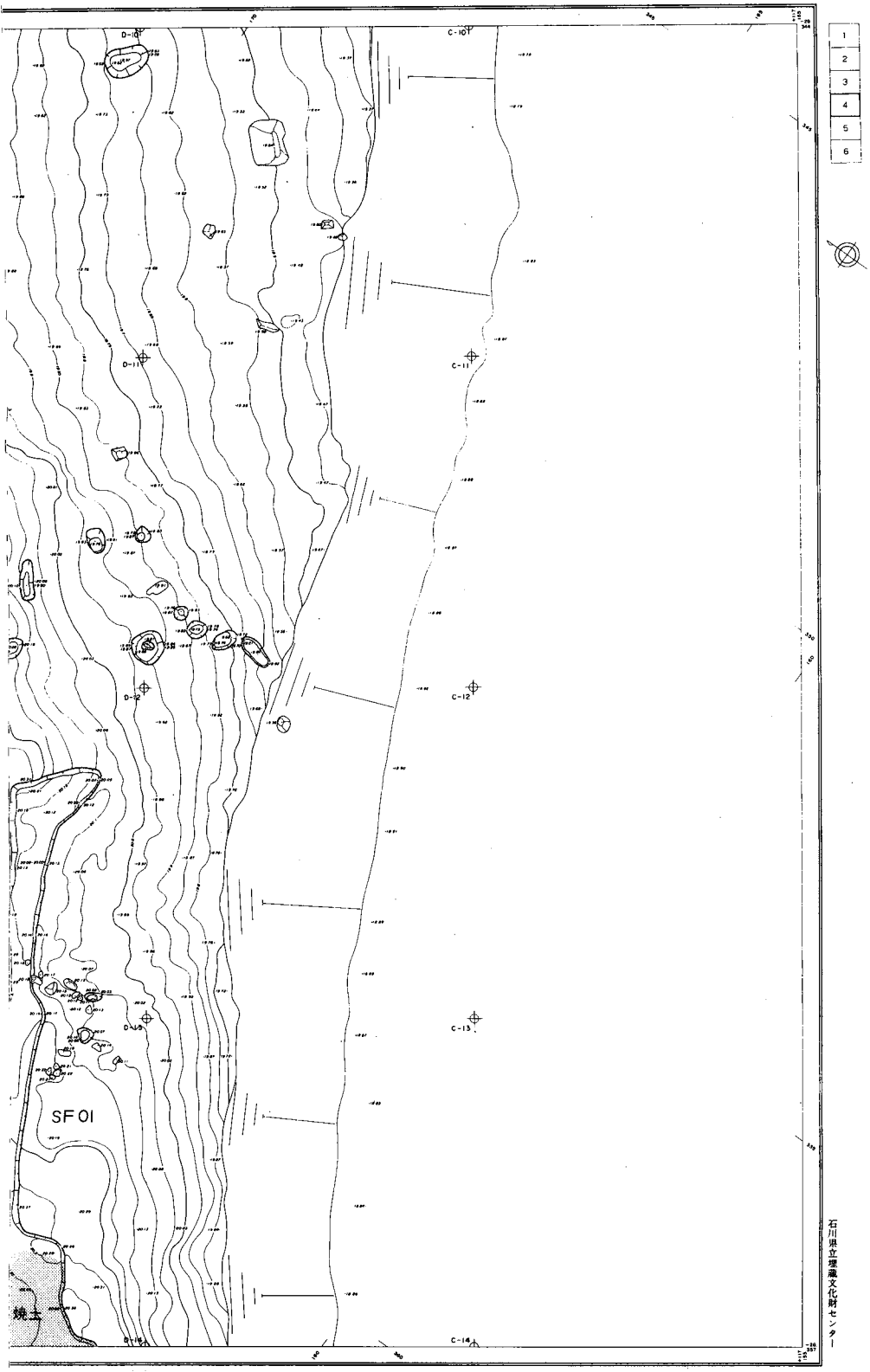


石川県立埋蔵文化財センター

第30図　II区遺構平面図(2)（S＝1/80）

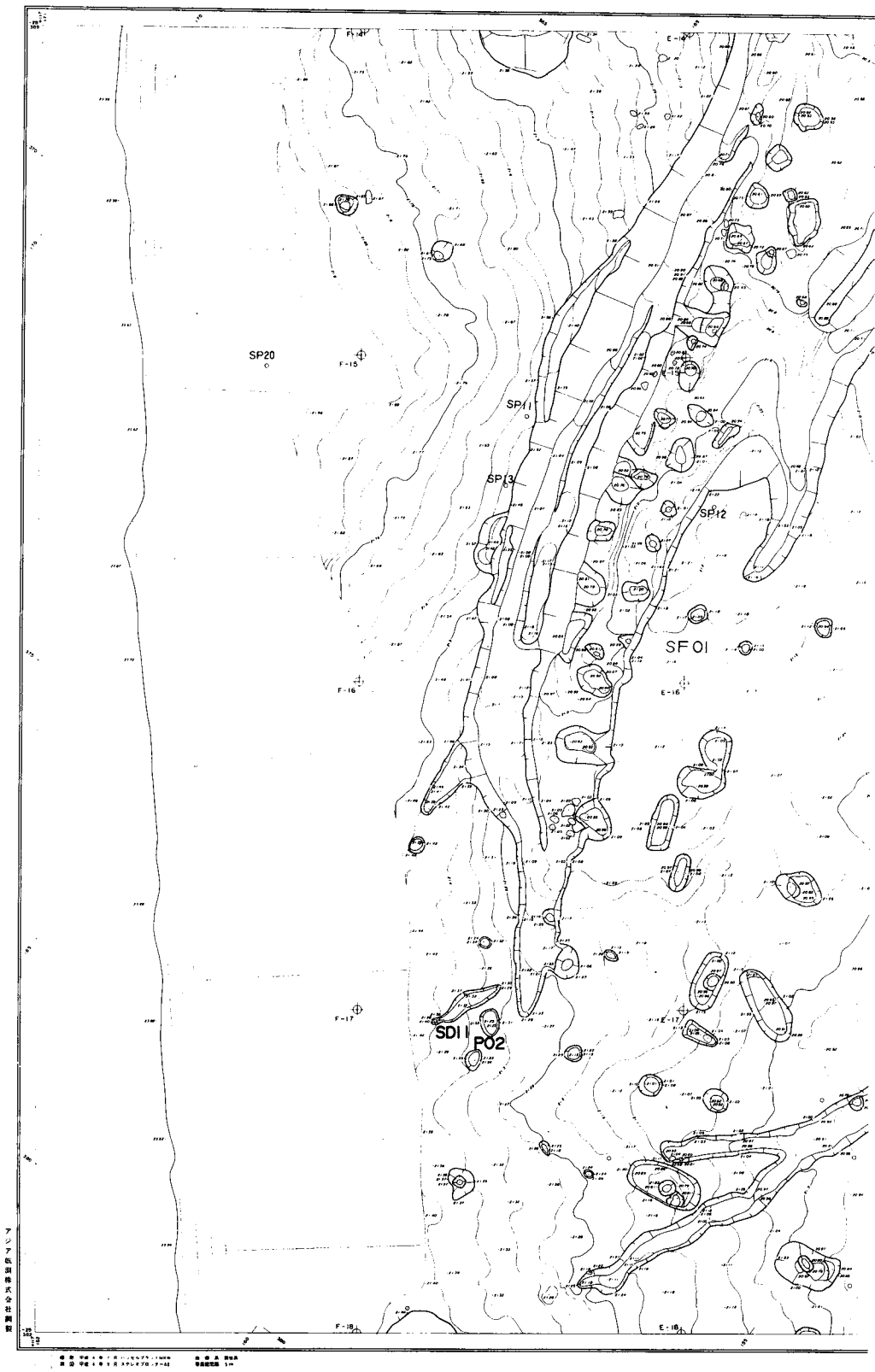


第31図　II・III区遺構平面図(1)（S＝1/80）

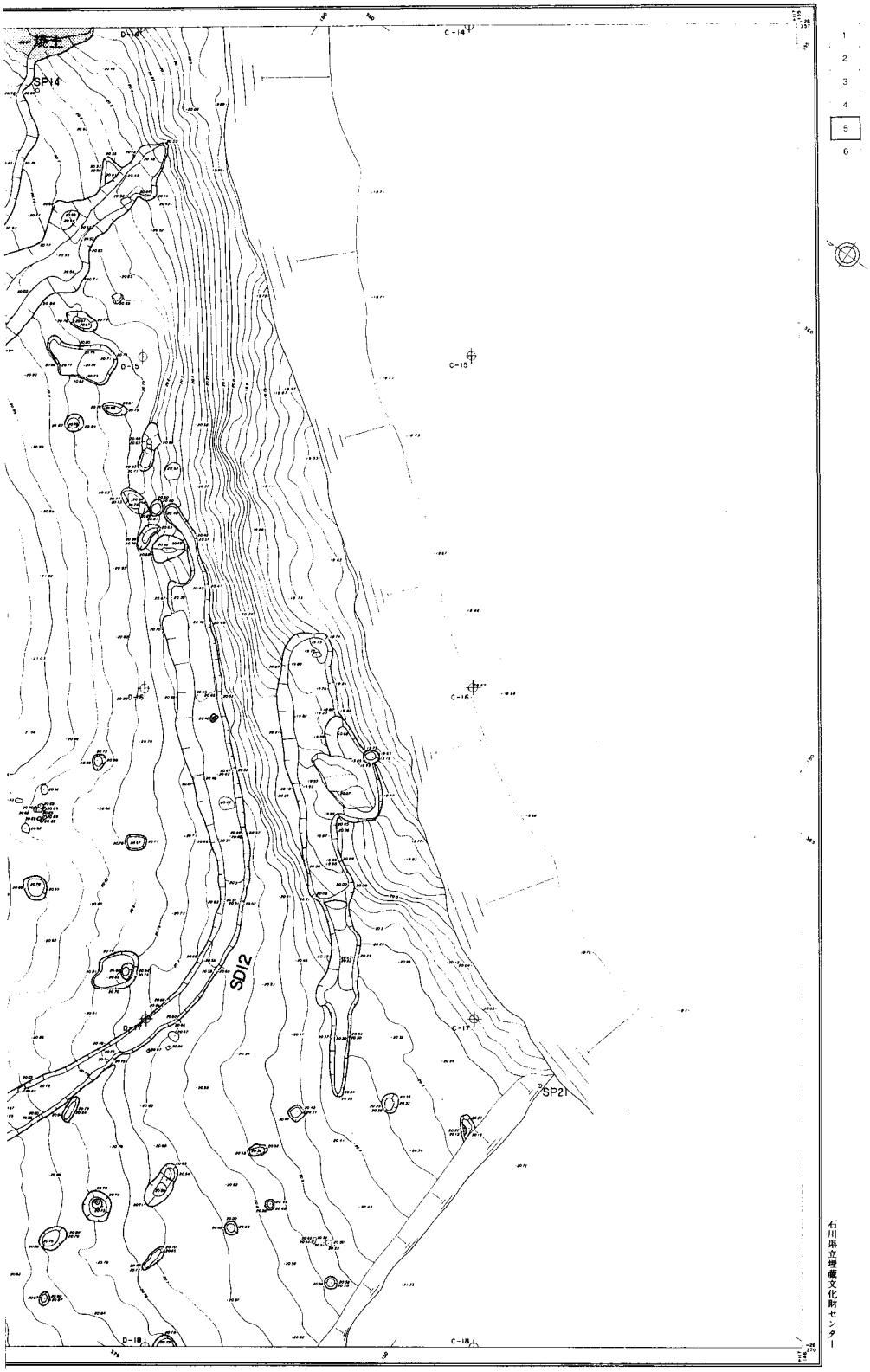


石川県立埋蔵文化財センター

第32図　II・III区遺構平面図(2)（S.＝1/80）

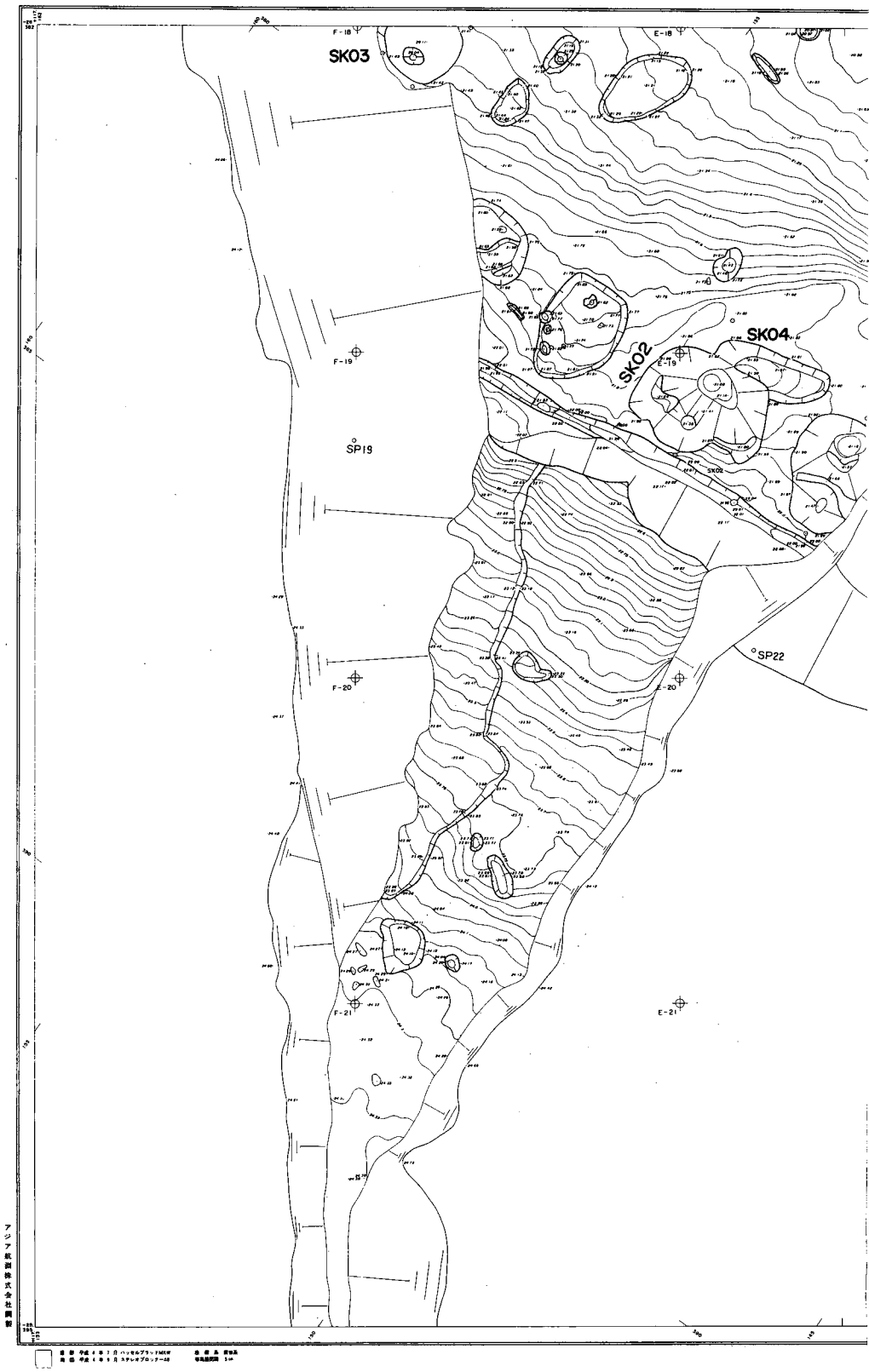


第33図　Ⅲ区遺構平面図(1)（S＝1/80）

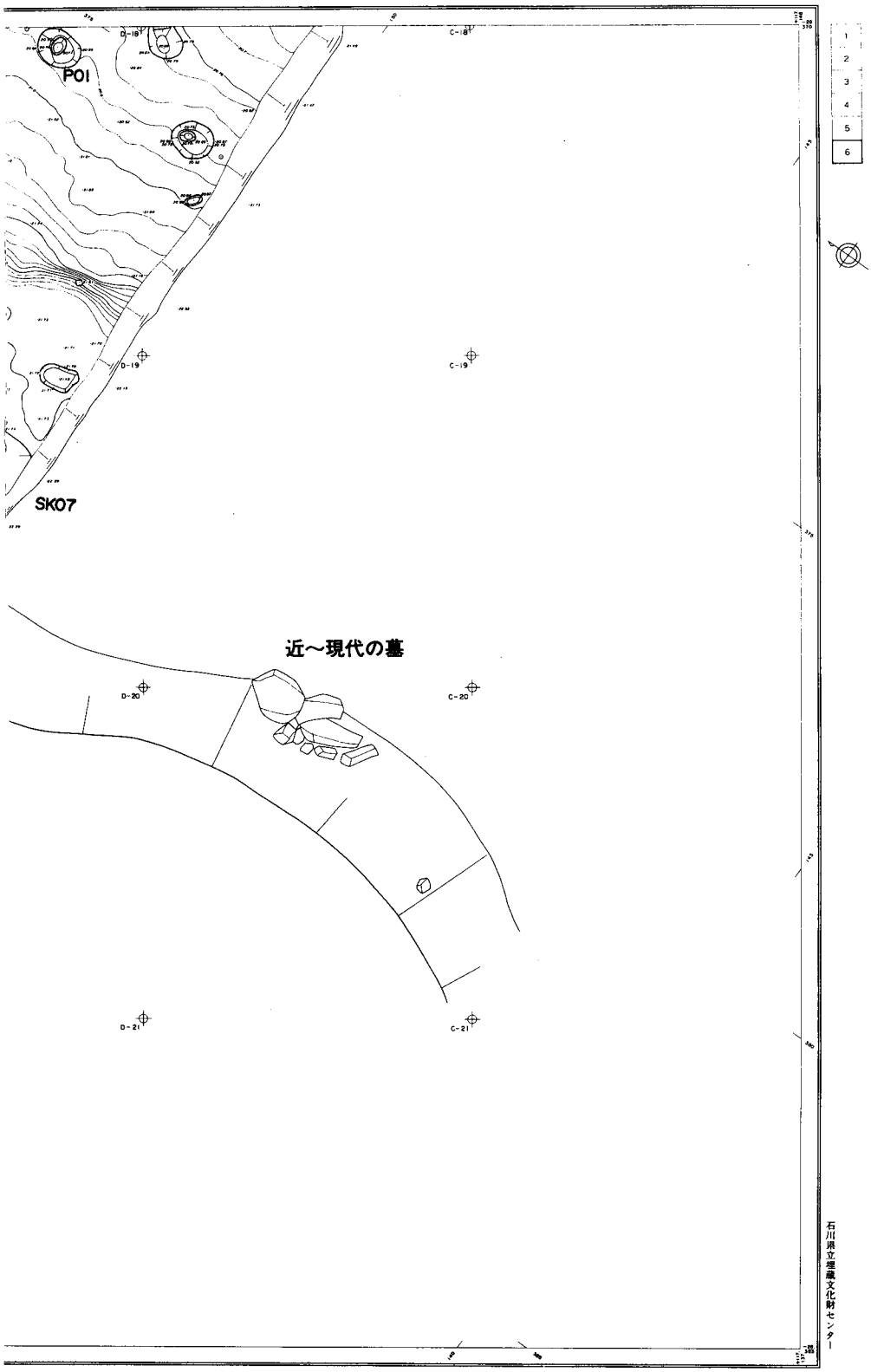


石川県立埋蔵文化財センター

第34図　Ⅲ区遺構平面図(2)（S＝1/80）



第35図　Ⅲ区遺構平面図(3)（S＝1/80）



第36図　Ⅲ区遺構平面図(4)（S＝1/80）

第5章 まとめ

大津ロクベエ遺跡は、天行寺山系の南南西丘陵端の谷地形で大津川の北に立地し、縄文時代・中世・近世の各時期の遺構・遺物を確認した。

縄文時代では自然の谷地形を確認しており、それに伴う小河川が検出された。その後の自然堆積により小河川は埋没し、その堆積層より縄文土器・石匙等の遺物が出土した。当時の本遺跡周辺には北方の大津入江に面した丘陵上に立地する大津遺跡や、南方の赤蔵山系端部の大津くろだの森遺跡等が所在しているが、調査区北方の丘陵は大津遺跡と谷を挟んで面することから本体はこれに求められよう。

次に確認された時期は中世であるが、本遺跡北西方の試掘トレンチ2の西端より出土した須恵器の時期が7世紀代に比定されることから、北方の丘陵上ないしは、丘陵谷平坦部に遺跡が存在している可能性があると思われる。次年度以降に調査が予定されており、今後確認されるだろう。

中世では山際の緩斜面において3時期の遺構面（第1・2・3面）を確認した。そのうち上層の2面（第1・2面）は黄褐色系地山土により盛土整地されたものであった。

まず第1面では、畑の畝溝を検出し、時期は出土した珠洲焼より吉岡編年[7]のⅢ期末で13世紀末～14世紀初頭と位置付けられる。

次に第2面は、第3面においてこの遺構を切る土坑を検出し、調査区東壁断面観察の結果、確認されたものである。時期は吉岡編年[7]のⅠ期でも末で12世紀後半と考えられる。

第3面は自然堆積された暗褐色～黒灰色シルト土層で、畑の畝溝・土坑等を検出した。時期は第2面以前のそれほど遡らない程のものと思われる。

近世は井戸・土坑・溝等を検出した。井戸は1基確認し、出土遺物は唐津系陶器及び越中瀬戸焼皿である。唐津系陶器は皿と建水で、皿は胴部から口縁部へ若干内湾気味に立ち上がるタイプで、うち絵唐津も出土した。時期は大橋編年のⅠ期[6]に相当し、1610年以前と考えられる。また越中瀬戸焼皿は覆土の上層上位より出土し、時期は17世紀中頃と思われ、この井戸の使用期間としては、17世紀初頭から中頃までの約半世紀間と考えられる。

本調査では、この井戸に伴う建物等の遺構を確認するには至らなかったが、現在の町道下ないしは北上丘陵谷平坦部において存在する可能性も否めないと思われる。

次に土坑については、調査区西外側に近～現代の表示石を伴う墓が2、3基あり、これが土坑と列状配置が認められることから、おそらくこれにつづく墓壙の可能性を示しておきたい。時期は井戸出土の唐津系陶器建水との接合資料が認められることから、大橋編年[6]のⅠ期と考えられる。

またこれらの出土遺物は、各々用途別に、皿は食膳具及び灯明具、建水は茶道具すなわち嗜好的道具として分類することができ、比較的裕福な生活状況が窺えられる。

この他特徴的なこととして、道状遺構が検出されたことである。この道の性格としては、第1章位置と環境でも触れたが本調査区北上の町道は大津往来の一部に該当する可能性があり、仮に

そうした場合、検出された道状遺構は方向的に北西上の丘陵に向っていることと、道幅が1m程度であること等から、同街道からの枝分的道の一つとして位置付けられると考える。使用期間は、出土遺物により、17世紀初頭〜18世紀前半と思われる。

この様に近世において本遺跡が営まれた時期は17世紀初頭から18世紀前半の約1世紀間と考えられる。

以上本遺跡について述べてきたが、田鶴浜町においてこの様な発掘調査に伴う近世陶磁器の出土は管見の知る限り初見で、今後資料が増加し近世における同地域の様相が明らかになることを期待したい。

注

(1) 川畑　誠　「田鶴浜大津遺跡－発掘調査の中から－」『石川県立埋蔵文化財センター所報』第37号　石川県立埋蔵文化財センター　1992

(2) 唐川明史　「徳田古墳群略報」『石川考古』第178号　石川考古学研究会　1987

(3) 唐川明史　「燈明山古墳（徳田第1号墳）について－中間報告－」『第42回石川県五学会連合研究発表会資料』　1992

(4) 宮下栄仁・垣内光次郎「赤蔵山遺跡採集遺物報告」『石川考古』第167号　石川考古学研究会　1986

(5) 田鶴浜町史編纂委員会　『田鶴浜町史』　田鶴浜町役場　1974

(6) 大橋康二　『肥前陶磁』考古学ライブラリー55　ニュー・サイエンス社　1989

(7) 吉岡康暢監修　『珠洲の名陶』　珠洲市立珠洲焼資料館　1989

参考・引用文献

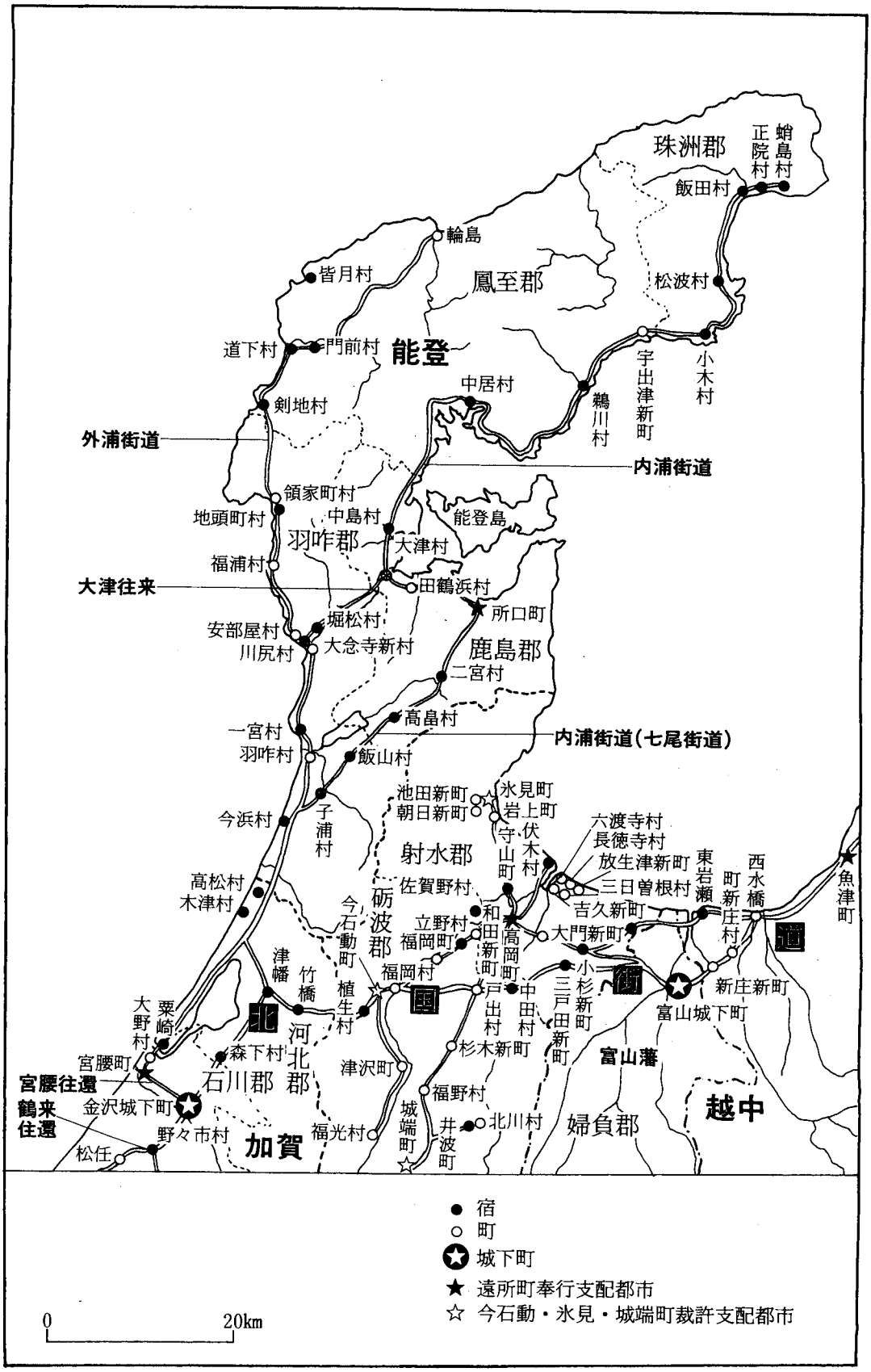
角川日本地名大辞典編纂委員会編　『角川日本地名大辞典』17石川県　角川書店　1981

若林喜三郎・高澤祐一監修　『石川県の地名』日本歴史地名体系第17巻　平凡社　1991

志賀町史編纂委員会・同編纂専門委員会編　『志賀町史』第5巻沿革編　志賀町役場　1980

近江俊秀　「鴨神遺跡　第4次調査」『鴨神遺跡』奈良県文化財調査報告書第66集　奈良県立橿原考古学研究所　1993

田中喜男　『近世在郷町の研究』　名著出版　1990



第37図　近世の主要街道

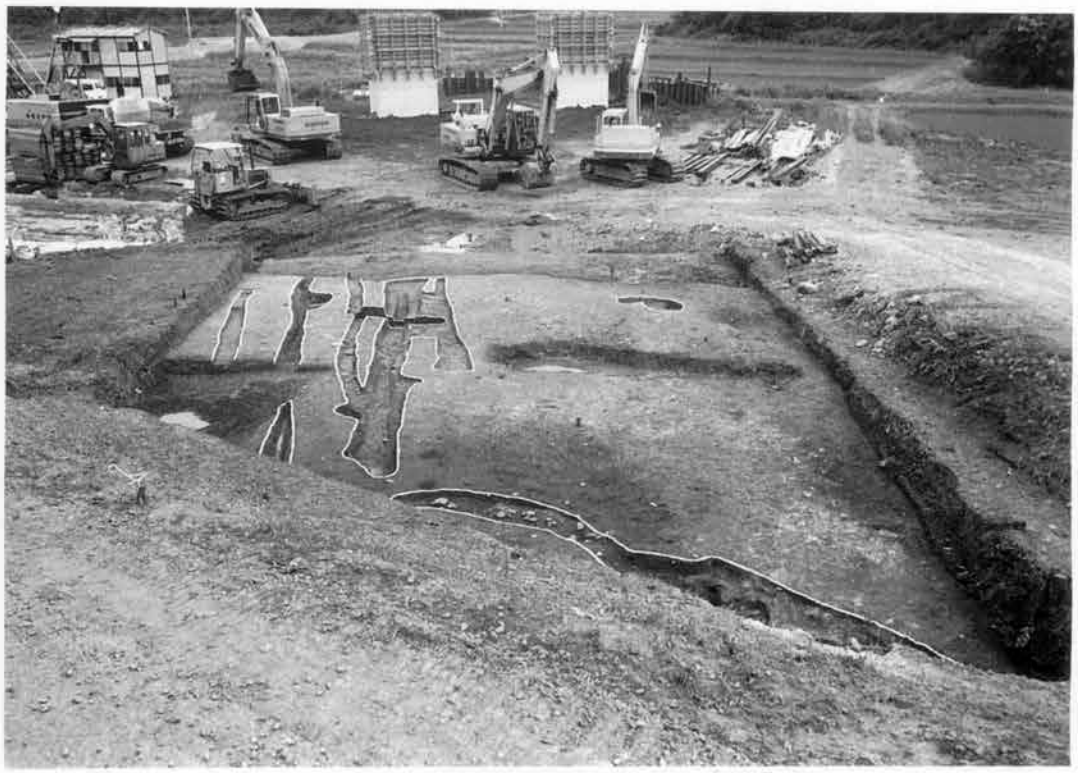
図　　版

図版1

遺跡周辺の垂直写真（S≒1/8,000：1987年11月26日撮影）

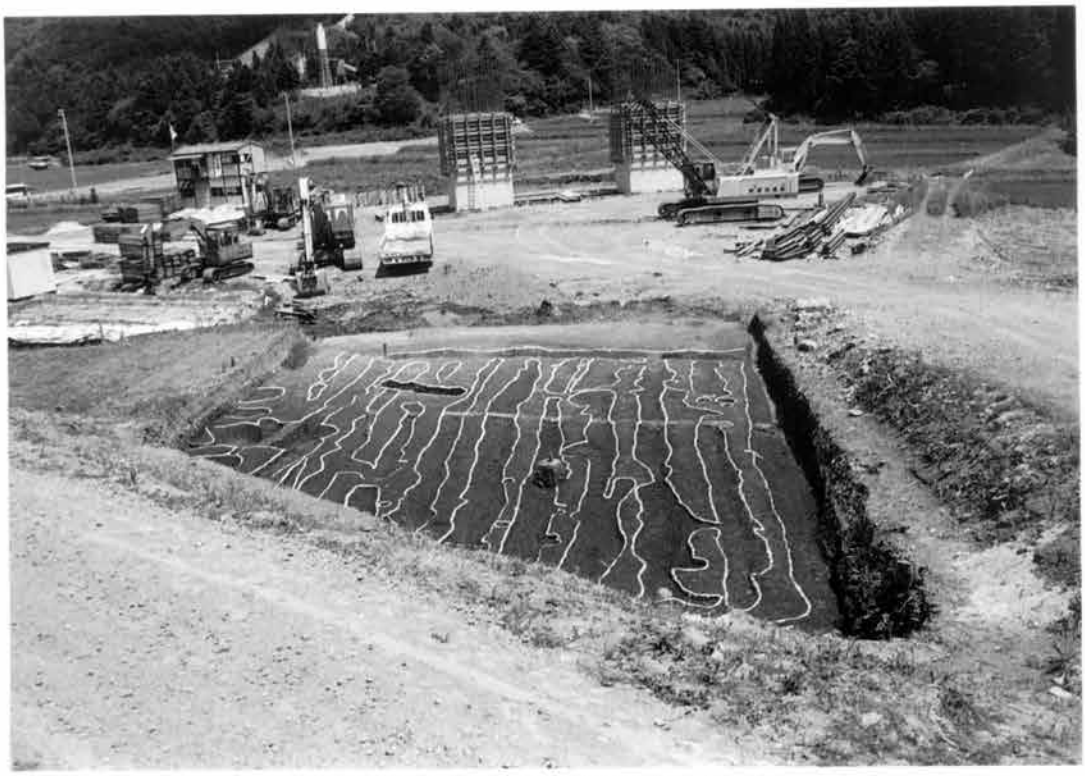
図版2

Ⅰ区上層面遺構検出状況（北から）



Ⅰ区上層面遺構完掘状況（北から）

Ⅰ区中層面遺構検出状況（北から）



Ⅰ区中層面遺構完掘状況（北から）

図版4

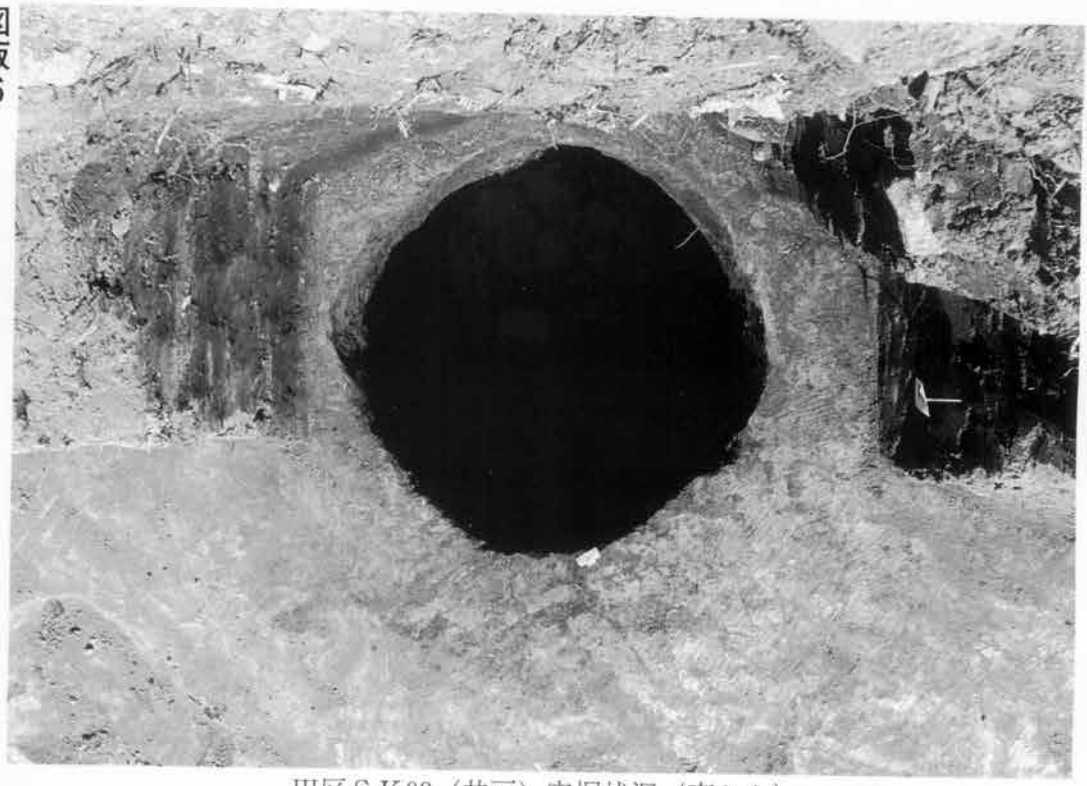
Ⅰ区下層面遺構調査風景（北西から）

Ⅰ区下層面遺構完掘状況（北から）

II・III区遺構検出状況（西から）

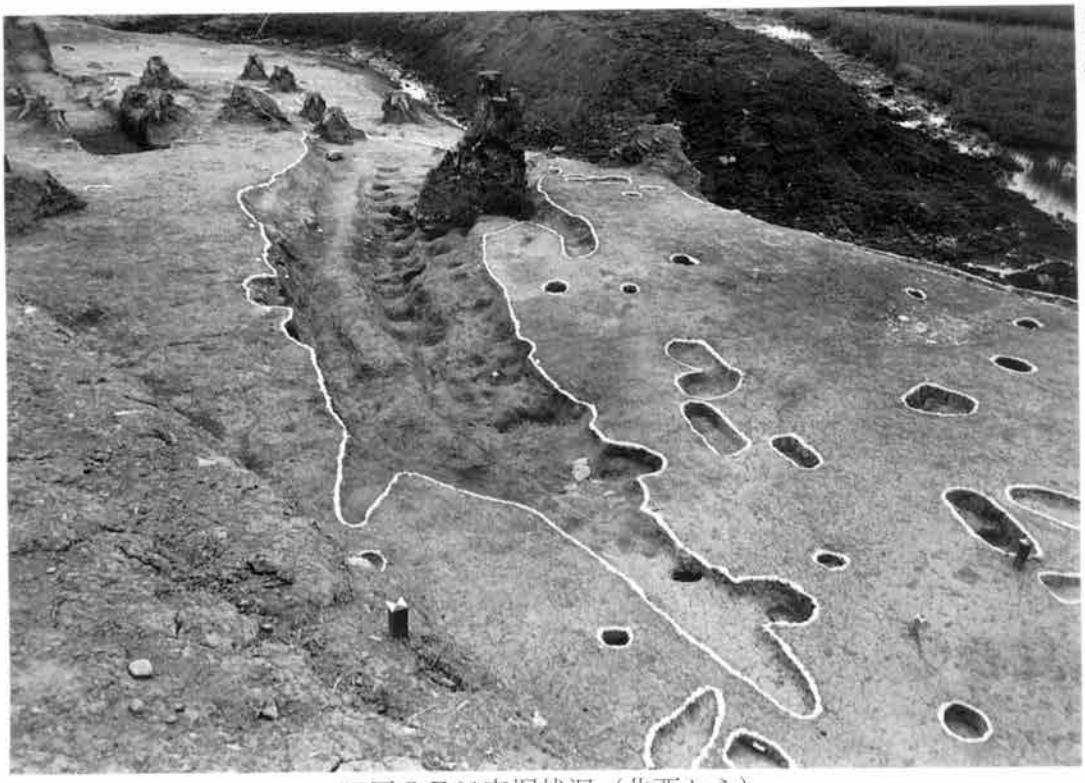
II・III区遺構完掘状況（西から）

図版6

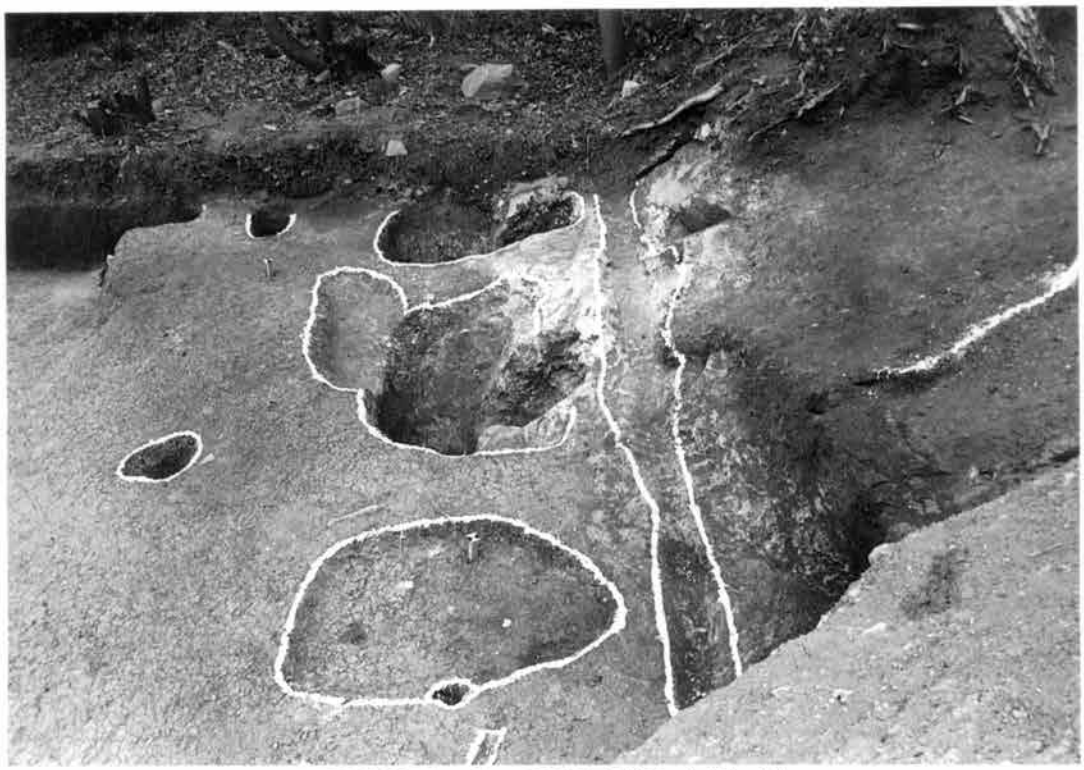


Ⅲ区ＳＫ03（井戸）完掘状況（南から）

Ⅲ区ＳＫ03（井戸）完掘状況（東から）

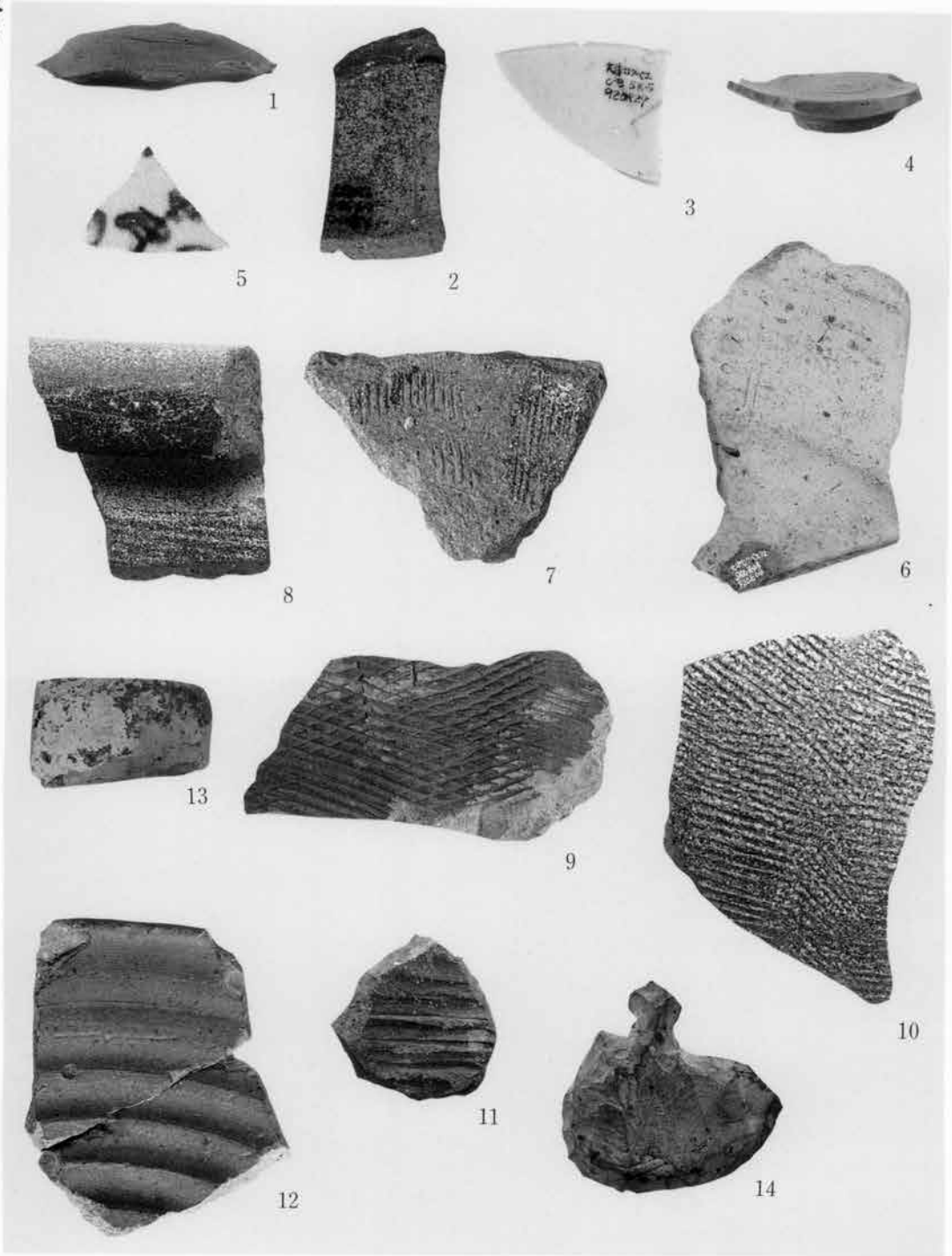


Ⅲ区ＳＦ01完掘状況（北西から）

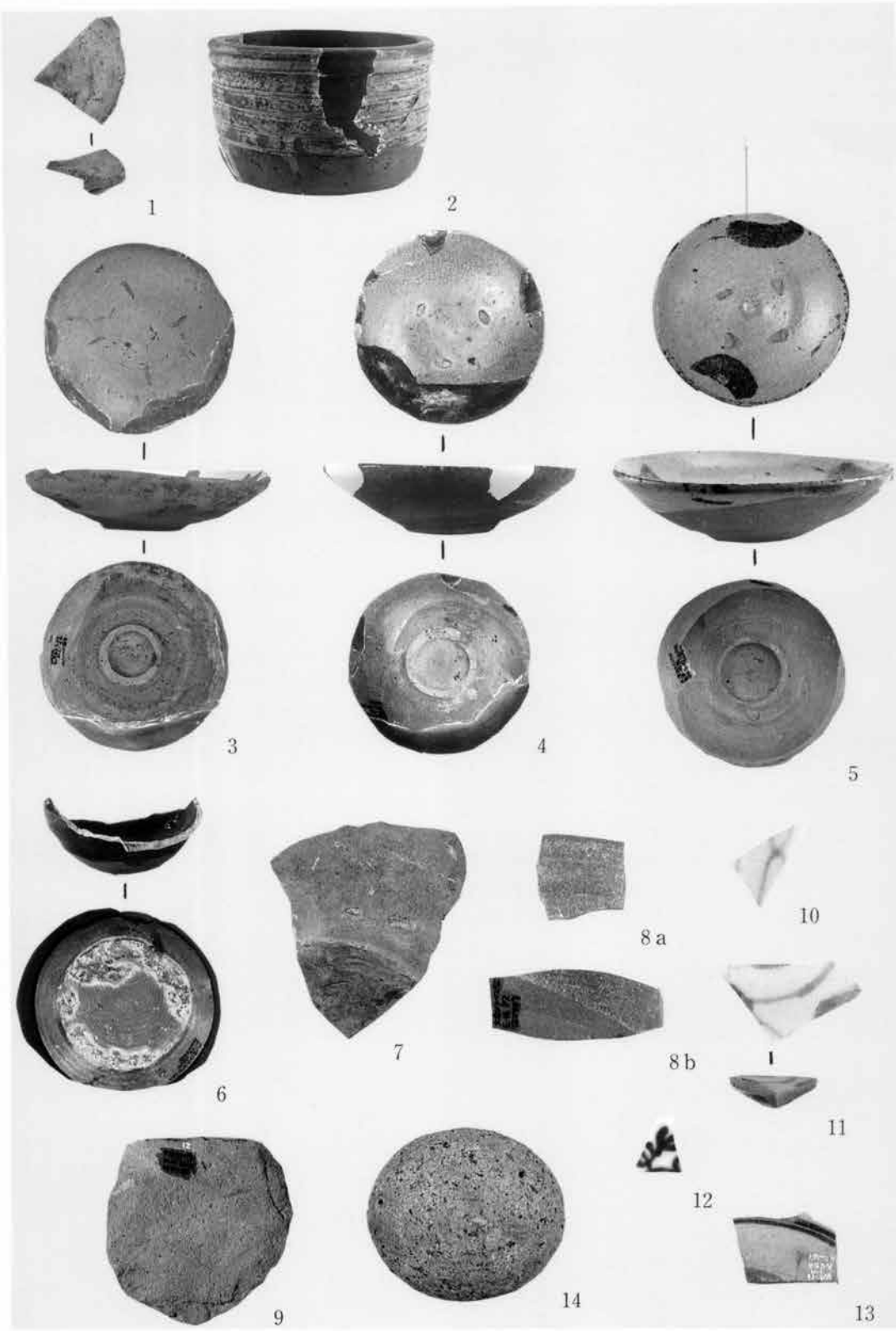


Ⅲ区ＳＫ02・04・07完掘状況（東から）

図版8



北方丘陵谷部トレンチ調査及び1区出土遺物



III区出土遺物

大津ロクベエ遺跡

平成４年度一般国道249号線(能越自動車道)
改良工事に係る緊急発掘調査報告書

平成５年３月31日印刷・発行

編集・発行　石川県立埋蔵文化財センター

石川県金沢市米泉町４丁目133番地
〒921　電話（0762）43－7692番(代)

印　　刷　中川大正印刷株式会社

石川県金沢市北安江町447-2

©石川県立埋蔵文化財センター　1993